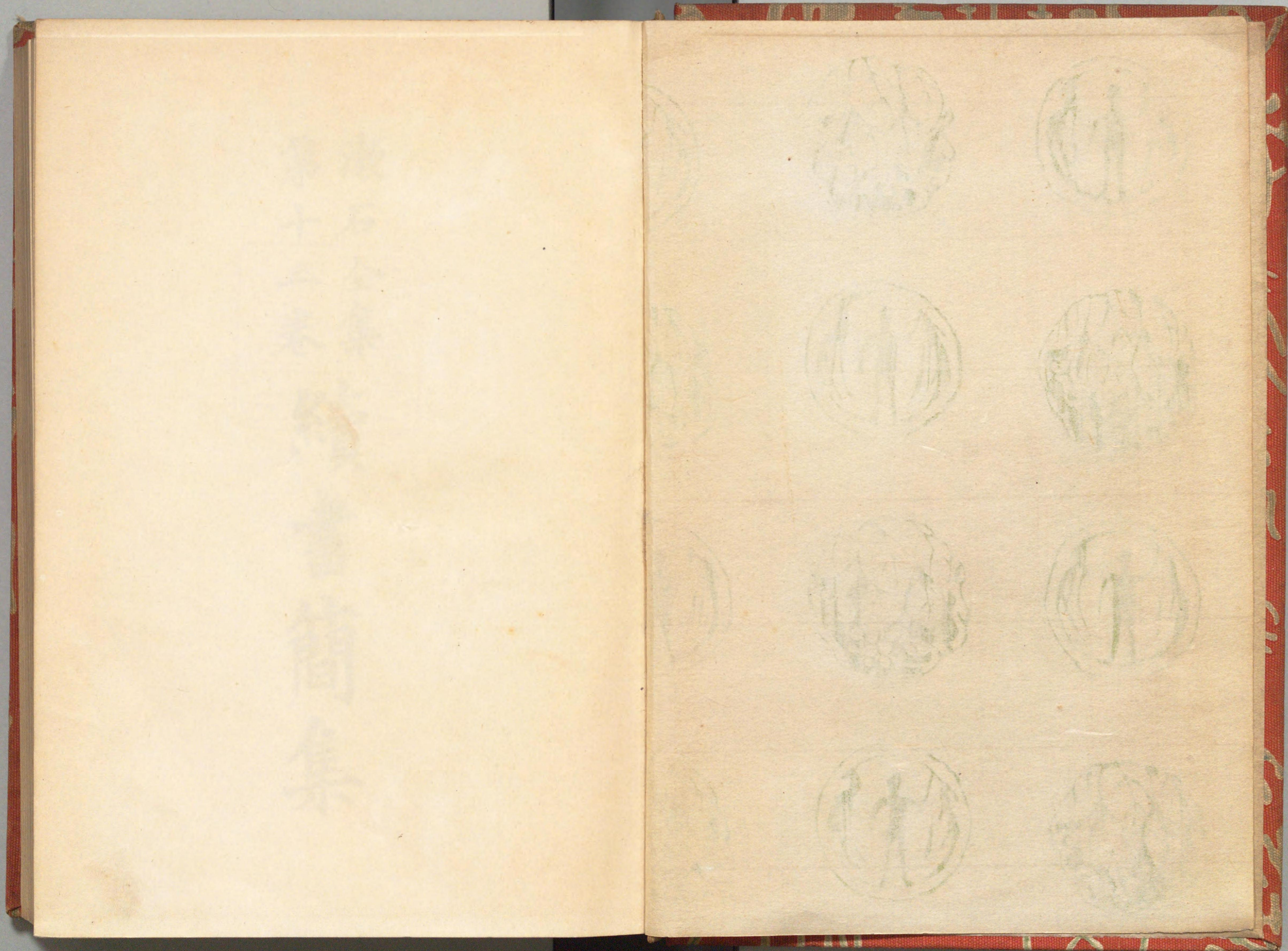


KH426-H60
1200700349274

〇 複写





漱石
第十



續書簡集

集中最後の書簡

KH426-H60



I 種
W



1200700349274

兼中景翁の書簡

Handwritten text in Arabic script, likely a list or index, written on a strip of paper pasted onto the left page. The text is arranged in approximately 15 horizontal lines, starting from the top and moving downwards. The script is cursive and appears to be a form of Maghrebi or Ottoman Turkish script.

兼中景翁の書簡



I種
W



葉子

葉子

葉子

葉子

葉子

葉子

葉子

葉子

葉子

葉子

葉子

葉子

葉子

葉子

目次

明治四十三年	大患以後	一
明治四十四年		二三
明治四十五年	大正元年	一二七
大正二年		二七一
大正三年		四〇一
大正四年		五四七
大正五年		六六五

補遺

二
七六一

索

引 其の一

一

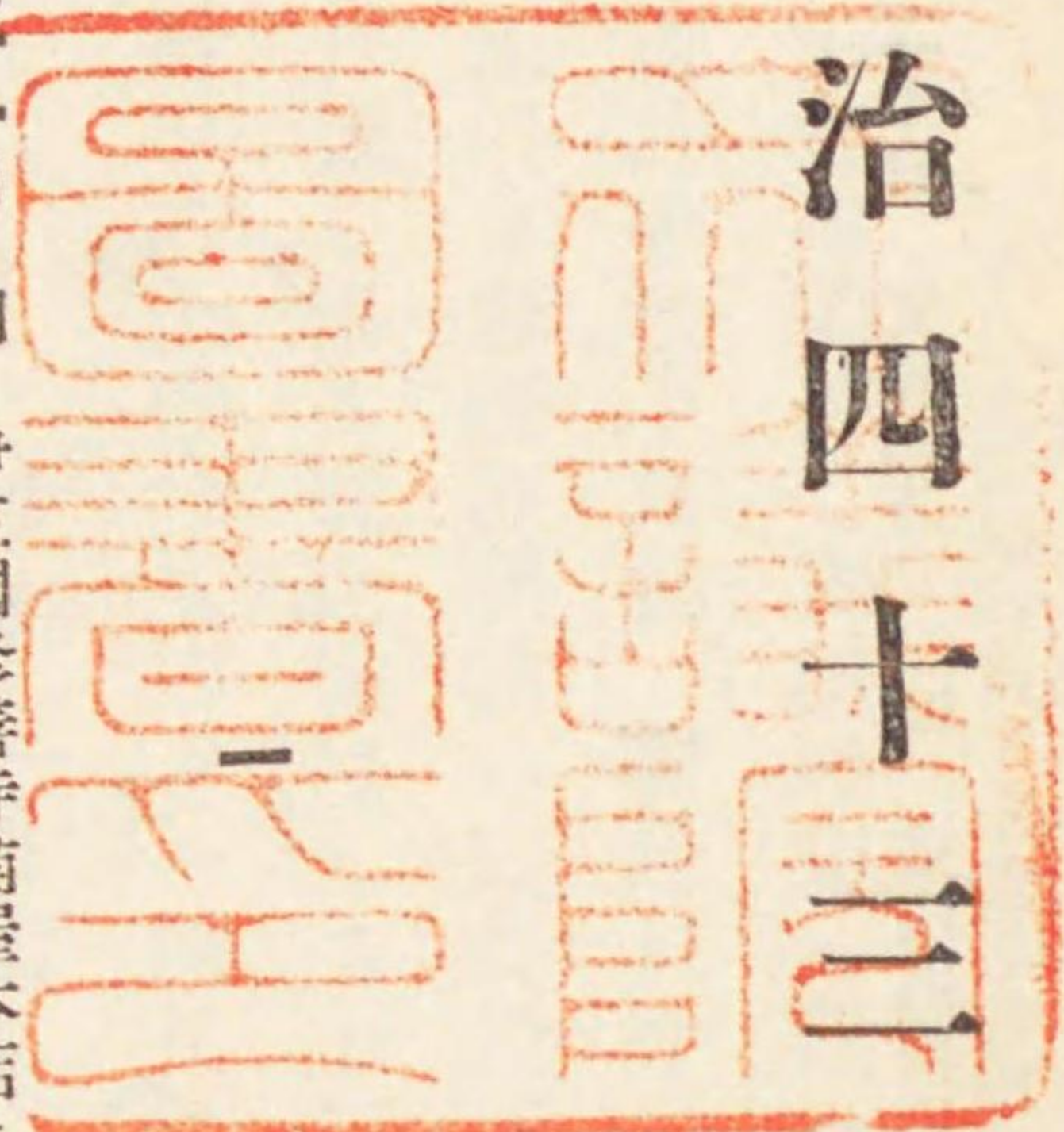
索

引 其の二

二五

明治四十三年

大患以後



九月十一日 朝 伊豆國修善寺菊屋本店より

牛込區早稲田南町七番地夏目筆子夏目恒子夏目えい子へ

〔手帳の紙一枚の表と裏とに〕

八月十一日

けさ御前たちから呉れた手紙をよみました。三人とも御父さまの事を心ばいして呉れて嬉しく思ひます。

此間はわざ／＼修善寺迄見舞に来てくれて難有う。びよう氣で口がさけなかつたから御前たちの顔を見た丈です。

此頃は夫分よくなりました。今に東京へ歸つたらみんなであそびましょう。御母さまも丈夫でこゝに御出です。

るすのうちはおとなしくして御祖母さまの云ふことをきかなくつてはいけません。
三人とも學校がはじまつたらべんきようするんですよ。

御父さまは此手紙あおむけにねてゐて萬年ふででかきました。
からだがつかれて長い御返事が書けません

御祖母さまや、御ふささんや、御梅さんや清によろしく。

今こゝに野上さんと小宮さんが来てゐます

東京へついでであつた時修善寺の御見やげをみんなに送つてあげます。
左様なら

筆 子

恒 子 へ

え 子

父より

十月二十日 午後二時—三時 麴町区内幸町胃腸病院より

牛込區矢來町六十二番地森田米松へ(四〇) (はがき)

拜啓面會謝絶にて御出の時も碌々口もきかず、定めし御氣に障る事と存候へども病氣の我儘序
に當分御許容被下度候。實際只今の小生の唯一の樂は只一人で其日を暮す事に有之候。

御約束の文藝欄原稿第一回御送致し候間可然御取計願上候。毎日送る事も隔日になる事も、或
は三四日抜く事も有之候はんも少しは長くつゞく事と存候。長さも内容も不定に候へば其邊も時
時御見計ひの上他のものと一所又は獨立して御掲載願上候。 不

十月二十日

三

十月三十一日 午前八時—九時 麴町区内幸町胃腸病院より
本郷區駒込西片町十番地畔柳都太郎氏へ(二五) (はがき)

御見舞難有候。段々輕快に候御喜可被下候。一寸妻が御禮に上るべき筈の處取紛れ未だに缺禮
致居候。面會謝絶は御聞及の通に候。夫でも時々襲はれ申候。原稿に就ての御注意難有候。他の
人からも叱られ申候。然し無理は不致候。御案し被下間敷候。何事もたゞ閑靜なるが今の小生に
取りては結構に候。本など取り散らし讀み居候。人に逢ふより本を讀む方遙かにうれしく候。日

三

本の雑誌はいやに候。小説もいやに候。

四

十月三十一日 午前八時—九時 麴町区内幸町胃腸病院より

本郷區臺町二十七番地鳳明館東新へ(三) 「はがき」

拜啓ランゲンシャイツの獨英丸善より着致候。直接に病院へ送る様申上候處矢張早稻田の宅へ送り候。他の佛英及び英佛未着なれど、もし丸善より參るならば直接病院へ届く様御取計願上候。色々御手数數恐縮致候。 勿々

十月三十日

五

十月三十一日 午前九時—十時 麴町区内幸町胃腸病院より

牛込區早稻田南町七番地夏目鏡へ(三八)

きのふ御前から御醫者の禮の事に關し不得要領の事を聞かされたので今朝迄不愉快だつた。御

前も忙がしい、坂元も忙がしい、池邊も忙がしい、澁川は病氣だから寐てゐるおれの考通り着々進行する事は六づかしいが、病人の方から云ふ「と」あんな事は萬事知らずにあるか、さうでなければ一日も早く醫者にも病人にも其他の關係者にも満足の行く様にはやくてきばきと片付く方が心持がよろしい。どうか今度其話をする時はもつと要領を得る様に願ひたい。

今のおれに一番藥になるのはからだの安靜、心の安靜である。必ずしも藥を飲んでゐる許や寐てゐる許が養生ぢやない。いやな事を聞かされたり、思ふ様に事が運ばなかつたり、不愉快な目に逢はせられたりするのには、藥の時間を間違へたり菓子を一つぬすんで食ふよりも悪いかも知れない。

昨夕も云ふ通り今のおれは今迄の費用のかたがはつきり就いて、病室の出入がざわ／＼しないで、朝から晩迄閑靜に暮す事が出来て、(自分の隨意に一人で時間を使ふ事)さうして日々身體が回復して食慾が増しさへすれば目前はまあ幸福なのである。病人だから勝手な事をいふが、實際さうだよ。

一 澁川に返す本の事を忘れてはいけない。

一 野上に謠の本をどうする積だとさく事を忘れてはいけない。

世の中は煩はしい事ばかりである。一寸首を出してもすぐ又首をちぢめたくなる。おれは金がないから病氣が癒りさへすれば厭でも煩はしい中にこせついで神経を傷めたり胃を傷めたりしなければならぬ。しばらく休息の出来るのは病氣中である。其病氣中にいらくする程いやな事はない。おれに取つて難有い大切な病氣だ。どうか樂にさせてくれ 穴賢

十月三十一日

金之助

鏡子殿

六

十一月五日

麴町区内幸町胃腸病院より

京橋區新肴町二番地大和館森次太郎氏へ(六)

啓先刻御出被下候節は午前中原稿をかきたる爲にやいたく疲勞致居つい失禮千萬御海忍願上候
さてかねて御話しのお藏澤の竹一幅わざ／＼小使に持たせ御届披見大驚喜の體、假眠も急に醒め
拍手踴躍致居候いづれ御目にかゝり篤く御禮可申上候へども不取敢御受取旁一札如此に候 勿々
十一月五日

金之助

圓月様

硯北

七

十一月九日

午前十時—十一時 麴町区内幸町胃腸病院より

Bei Frau Lohseisen, Planckstrasse 18, Göttingen 寺田寅彦へ(三三)〔修善寺獨鈷の湯繪はがき〕

僕は漸く輕快になつて此病院に歸臥してゐる。まづ當分は死にさうもない、喜んで呉れ玉へ。
先達ての旅行の手紙は面白かつた。あれを朝日の文藝欄に載せた。又何か書いてくれ玉へ。僕病
中の回顧録を「思ひ出す事など」と題して新聞にぼつ／＼書き始めた。何れ出版のとき單行にす
るか、他と合本にするだらうから其時あげる

八

十一月十日

午前十時—十一時 麴町区内幸町胃腸病院より

七

牛込區市ヶ谷甲良町二十番地金子雄太郎氏へ (二) 「はがき」

八

拜啓小生病氣につき御懇篤なる御見舞難有拜見致候。俳句の事承知致候。畫帖小包にて御届ありたく候。すぐと申す譯には參りかね候はんか、句も新らしく作るや舊作にて間に合すや計りがたく候右御承知願上候

九

十一月十二日

午前十時—十二時 麴町區内幸町胃腸病院より

府下巢鴨町上駒込三百三十四番地野上豊一郎へ (三九)

御手紙拜見致候其後は如仰頓と來客に接せず専ら静養をつとめ居候體力は漸々回復の模様まづ御休神願上候

病中の難有き閑静を思ふと世の中へ飛び出すのが恐ろしく候

謠も再興出來可申か頗る覺束なく候へども先づやれるものとして過日愚妻に依頼願上候四方太の御父さんに可然御たのみ可被下候

病院では來客を謝絶し讀書に耽り居候少々佛語を勉強致居候分らぬ字を佛獨の字書で引き分らぬ獨乙語があると又獨英で引くといふやうな手間のかゝる方法を用ひ居候退院迄には双方とも物

に致し度と存候。犬の科料話の種に候成程壹圓二十錢では高過申候能成の小便も始めて承はり候。もう巢鴨の邊は秋の景色で嘸よき眺めならんと存候今年の秋の景色は想像する丈で遂に冬になるべきか幸ひに南側にて暑い程好く日が射し込み候故冬の日は籠るに便宜かとも存居候其向方に向ひ候はゞ拜顔の上萬縷可申述候不取敢御禮迄 匆々不一

十一月十一日夜

金之助

豊一郎様

一〇

十一月十二日

使ひ持參 麴町區内幸町胃腸病院より

麴町區内山下町一丁目一番地東洋協會内森次太郎氏へ (七)

拜啓先日御寄贈の竹病院の壁間に懸け毎日眺め暮らし候今朝不圖一句浮び候まゝ記念の爲め短冊に認め進呈致し候病院に在つて自家になき小生の句としては甚だ嘘の様なれど先づ家に歸りたる時の光景と御思ひ可被下候先は右迄餘は拜眉 草々

十一月十二日

九

森 様

金之助

一一一

十一月十五日

午前九時—十時 麴町区内幸町胃腸病院より
牛込區辨天町百七十二番地山田繁氏へ (三) 「修善寺虎溪橋繪はがき」

新橋で御出迎を受けてからまだ御目にもかゝらず、御禮も申上ません。私は段々好い方で、毎日毎日生き延びて居ります。電話の御取次を度々願ひまして済みません。昨日は又奇麗な花をわざわざ御届下さいまして、まことに難有う御座います。あの「花は」甚だ勢が好う御座います。枕元に置いて眺めてゐます。 頓首

一一二

十一月十七日

麴町区内幸町胃腸病院より
金子雄太郎氏へ (二)

拜啓 今朝はわざ／＼御見舞頂き難有奉謝候其節かねて御依頼の畫帖並びに短冊二葉たしかに落筆致候御希望により拙筆相認め申候につき明朝にても御序の時に乍御面倒使のもの御遣はし相成度候、平生拙筆の上出来事外あしく候へども既に書きたる後にて消を致す餘地も無之不得已恥を御目にかけて候

病院にて雅印一個も持合せ無之もし御懇望に候へば畫帖早稻田宅へ御持越し其所にて漱石の落款御押し相成候ても宜しく候。午前中なれば愚妻在宅故書齋にある紫檀の小形の硯箱にある印と仰せあれば分り候。其中に手頃の印兩三顆有之筈に候。どれにても任貴意候先は御返事まで 艸頓首 「うっし」

十一月十七日

金之助

金子薰園 様

座右

一一三

十一月二十一日

午後三時—四時 麴町区内幸町胃腸病院より

一一

麴町區五番町三番地高濱清氏へ(二〇〇)

拜啓其後は御無沙汰に打過候。修善寺にては御見舞をうけ難有候、猶入院中の事とて御禮にもまかり出ず失禮致居候

別封宮寛と申す男より參り候中に大兄に關する事も有之候故入御覽候

此人は昔の高等學校生にて不治の病氣の爲め廢學致候ものなる事御覽の如くに候かゝる人の書いたものをホト、ギスへでも載せてやつたら嬉しがらうと思ひかたゞ入御覽候

文中小生の事のみ多く自分より云へば夫が憚に候。文字は別段の光彩も無之内容も夫程には見え不申、たゞ普通のものよりは幾分か新しき事あらんかと存候

右用事迄申上候、當節は小説も雜誌もさらひにて、日本書はふるい漢文か詩集の様なもの然らざれば外國の小六づかしきものを手に致し候夫がため文海の動靜には不案内に候。其方却つてうれしく候。新聞も實は見たくなき氣持致候 草々頓首

十一月二十一日

金之助

虚子様

一四

十一月二十九日

午前八時—九時 麴町區内幸町胃腸病院より
牛込區辨天町百七十二番地山田繁氏へ(四)

先刻は又電話の御取次を願ひました處早速御引受被下好都合難有う存じます夫から結構な薔薇をわざ／＼車夫に持たせて御よこし下さいまして是亦厚く御禮を申し上げます薔薇は早速花活に挿して眺めてゐます看護婦が好い香がすると申しますまことに美事でありませす 草々

十一月二十八日

夏目金之助

山田茂子様

一五

十二月一日

午後六時—七時 麴町區内幸町胃腸病院より
府下巢鴨町上駒込三百三十四番地野上豊一郎へ(四〇)

一三

拜啓其後御無音小生順當に漸次回復御安神願候

却説別紙長野の信濃新聞主筆桐生悠々君より到來致候處幸ひ大兄は與平さんと御懇意乍御面倒御周旋被下度候猶初刷に入要の事故急がねば間に合はぬ事と「存」候故其御積にて萬事願上候先は用事迄 草々頓首

十二月一日

金之助

豊一郎様

一六

十二月五日

午後四時―五時 麴町區内幸町胃腸病院より
府下葉鴨町上駒込三百三十四番地野上豊一郎へ(四)

拜啓先日は與平さんに御依頼早速御快諾をうけ難有候其旨直ちに桐生悠々君に通知致候處別紙の通申越候。然るに○を打つた所よく讀めず閉口なれど與平さんには分るだらうと存候につき御示し願上候。

猶差出先は長野市旭町信濃毎日新聞に有之候につきこれも合せて御通知願候

小生漸々よろしく候。朝起きた時は少し福々しく見え候然し晝から夜へかけて人相又々わるく逆戻を致し候。謠も今少ししたら御中間入をして稽古が出来る事と存候 草々
十二月五日

金之助

豊一郎様

一七

十二月七日

午後八時―九時 麴町區内幸町胃腸病院より
京都市吉田近衛十五番地厨川辰夫氏へ(三)

御書面拜見致候夏中より御病氣の由にて御臥床の由嘸かし御困却の事と存候小生も御承知の通大病に罹り一時は危篤に候ひしも幸ひに回復只今猶表記の病院にて静養中に御座候間乍憚御休神可被下候時下追々寒氣相募り候折柄折角御自愛可然候先は御挨拶迄 草々頓首
十二月七日

夏目金之助

厨川辰夫様

一五

十二月十二日 午前十時—十一時 麴町區内幸町胃腸病院より

府下菓鴨町上駒込三百三十四番地野上豊一郎へ〔四三〕〔はがき〕

拜啓御紙面拜見致候小生の寫眞にて御役に立ち候はゞ御使用被下度一向差支無之候右御返事迄

十二月十三日 午前十時—十一時 麴町區内幸町胃腸病院より

本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ〔六三〕〔はがき〕

啓。だれと酒を飲んだとか、だれと藝者をあげたとかいふことは一々報知して貰はないでも好い。其末に悲しいとか、濟まないとか云ふ事は猶更書いて貰はないで可い。余は平凡尋常の人である。凡ての出来事を平凡尋常の出来事として手紙に書いてくれる人を好む。 艸々

十二月十四日 午前十時—十一時 麴町區内幸町胃腸病院より

牛込區早稲田南町七番地夏目鏡へ〔三九〕〔はがき〕

啓上。小宮が御嫁さんを貰ふから何かやつたら好からう。國へ歸る前の方が好くはないか。品物は別に心當なし。毛織の厚い襯衣シャツ薄いのと引替たし。御序の節御持參を乞ふ。中村杉村の件は都合次第御片付可然。子供をあんなはにかみ屋に仕立てゝは行原けぬ。御用心。時々病院へ連れて來て無理にも口を利かせる様に御教育あるべし 以上。

十二月十四日 午後八時—九時 麴町區内幸町胃腸病院より

本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ〔六四〕

拜啓君の結婚につき何か祝ひのものを上げると妻に手紙を出して置いた。可成歸國前がよからうとも書き添へた但し品物は心當りなき旨も報知して置いた。もし細君の着物でも貰ふなら妻と相談して夫を買つて貰つたらどうだらう。或は君が別に望むものがあるなら夫を妻の方に通し給

へ。記念になるものと思ふが別に妙案も浮ばず。内丸と野村のときは發句を染め抜いた縮緬の伏原秘をやつた。

あゝいふ端書を見たら心持を悪くするだらうと思つてゐた。けれどもあゝ書かなくては僕の主意が君に通じない様な心持がした。僕の心持も通じないでたゞ君の感情を害した丈なら真に無益の所爲である。僕は自分の腹立まざれにあの端書を上げたのではない。君の近來の傾向にアンチ・シ・シスを與へる積で書いた。君の様な手紙は森田とか次郎にやるべきである。僕からあんな返事を貰つたら世の中には草平や次郎ばかり居らないといふ事に氣がつき給へ。君の心持を害したる事は不得已して冒したる僕の罪なり、後に餘波をとどむる事御無用なり 草々

十四日夜

金之助

豊隆様

二二

十二月十七日 午後六時—七時 麴町區内幸町胃腸病院より

牛込區矢來町六十二番地森田米松へ (四二) 「はがき」
「極光」が宿替を致し「思ひ出す事など」が毎日顔を出すに至りて少々面喰ひ候如何なる事情
にや

十二月十七日

二三

十二月十八日 午後八時—九時 麴町區内幸町胃腸病院より

牛込區矢來町六十二番地森田米松へ (四三) 「はがき」

拜啓御手紙拜見致候。文中時效にかゝりたりとて活版をコハシとある意味分りかね候。何の事
なるや

十二月十八日

二四

十二月二十日 午前十時—十一時 麴町區内幸町胃腸病院より

牛込區矢來町六十二番地森田米松へ〔四三〕〔はがき〕

啓時效にかゝつた事情ぢやない「時效にかゝる」といふ字面の意味が解しかねるのである。活版をコハシテ報知しなければ報知してくれと仰やい。

并ジュアリゼーションでも并ジュアライゼーションで「も」同じ事也。ゼーの所にアクセントがあるから前のシラブルの母音は長くても短かくても差支なきなり。東などをオーソリチーにせず改めるなら字引を御引きなす。

二五

十二月二十六日

午前十時—十一時 麴町區内幸町胃腸病院より
牛込區矢來町六十二番地森田米松へ〔四四〕〔はがき〕

啓「今年の劇界」五六回つゞき候上は編輯長に掛合ひ都合（雙方の）よきとき丈文藝欄を擴張「思ひ出す事など」も同日の紙面に載せる様に出來ずや。但し小生のは無論毎日と申す譯にてはなし

二六

十二月二十七日

午前十時—十一時 麴町區内幸町胃腸病院より
府下巢鴨町上駒込三百三十四番地野上豊一郎へ〔四五〕

歳晚嘸かし御多忙の事と存候御風邪如何に候や御大事に御療養可然候小生日に増し快氣の方御安心可被下候

楮別紙端書例の悠々先生より參り候につき御目にかへ候毎々御手数恐入候へどもどう「か」與平氏に御申傳願上候

八重子さんに久しく御目にかゝらず不相變赤ん坊で忙しい事と存候
先は右迄 艸々

十二月二十七日

金之助

豊一郎様

二七

十二月二十七日 午前十時—十一時 麴町区内幸町胃腸病院より

千葉縣成田町在押畑鈴木三重吉へ〔五〕

歳晚寒く候田舎は一層と存候病院にて越年珍らしく覺え候支那水仙猩猩々木薔薇など飾り居候寒梅をかく丈の風流も無之候

「小鳥の巢」の事春陽堂へ申入候何とか返事ある様致し置候參り次第早速御通知可申候然し今から宛にする事必ず御無用に候

太陽へ書く事賛成に候御書き可被成候 艸々

十二月二十七日

三重 吉様

金之助

二八

十二月三十日 午前十時—十一時 麴町区内幸町胃腸病院より

牛込區矢來町六十二番地森田米松へ〔四五〕〔はがき〕

元日のものは何も書かず候。客去客來思ひ出す事なども昨日迄書けず候

明治四十四年

一月二日 午後四時—五時 麴町区内幸町胃腸病院より

鹿兒島市第七高等學校野間眞綱へ〔六九〕〔はがき〕

〔印刷されたる年賀狀の端に〕

修善寺の御見舞後引きつゞき生き延び候、御安心願上候

二

一月二日 午後四時—五時 麴町区内幸町胃腸病院より

鹿兒島市春日町八十七番地皆川正禮へ〔二〇〕

〔印刷されたる年賀狀の端に〕

三三

漸く生き延び候、一句かき可申候

二四

三

一月三日 午前十一時—十二時 麴町区内幸町胃腸病院より

牛込區矢來町六十二番地森田米松へ (四六) 「はがき」

正月早々苦情を申候。われ等は新らしきものゝ味方に候。故に「新潮」式の古臭き文字を好ま
ず候。草平氏と長江氏はどこ迄行つても似たる所甚だ古く候。我等は新らしきものゝ味方なる故
敢て苦言を呈し候。朝日文藝欄にはあゝ云ふ種類のもの不似合かと存候

四

一月五日 午前十時—十一時 麴町区内幸町胃腸病院より

牛込區矢來町六十二番地森田米松へ (四七) 「はがき」

小言を豫期して書かれてはたまらない。あんな書方は「新潮」式だから「新潮」式と申すにて
古臭き故に古臭きに候

石井のをくれと云はれてすぐ日取をかへてあしたに出した動機が——文藝欄にとられては厭だ
といふ了簡なら玄耳は氣の毒な男なり。君たしかにさう思ふか

五

一月五日 午後一時—二時 麴町区内幸町胃腸病院より

佐賀縣神埼郡三田川村菅野行徳二郎氏へ (四八) 「はがき」

〔印刷されたる年賀狀の端に〕

くれには御母上と御令妹も御病氣のよし嘸御難儀と存候
私は次第によろしく候、御歸りの節御目にかゝり可申候

六

一月六日 午前十時—十一時 麴町区内幸町胃腸病院より

下谷區櫻木町二十八番地阿部次郎へ (四九) 「はがき」

賀正 (門差上てもよろしく候、期御面會の日)

二五

御風邪の由御大切に可被成候。五日の拙稿御ほめに預かり難有候、小生老人を以て自ら居り大兄青年を以て自ら任ず、左すれば小生の書いたものが一回だも君の氣に入るは、却つて小生の若き所を曝露したるに等し。呵々。

趣味は年に従つて變ず、永き年を通じて融通の利く趣味を有するものは其人の幸福に候。二十五の時は二十五の趣味、三十の時は三十の趣味丈ならばあまりいき苦しく候。

七

一月八日 午前九時—十時 麴町區内幸町胃腸病院より

牛込區矢來町六十二番地森田米松へ〔四〇〕 「はがき」

昨七日夜出したる「思ひ出す事など」二十四の末にある詩

秋露下南澗 黄花祭照顔
欲行沿澗遠 却得與雲還

のうち〇をつけた却の字を還と間違へて書いたかも知れず。もし間違つてゐたら御正し下さい

八

一月二十日 午前十時—十一時 麴町區内幸町胃腸病院より

埼玉縣南埼玉郡鷲宮村川羽田隆氏へ〔二〕

御手紙を拜見致しました。小生の病氣で色々御心配被下難有う御座います。病氣は段々快くなります。今では病氣前よりも目方なども増しました。たゞ用心の爲め病院の人となつて居ります。多分は二月一杯位居るでせう。「思ひ出す事など」御読み被下候よし御禮を申し上げます。毎日出る必要もないので途切れ〜になります。

南埼玉郡鷲宮とあるので宮寛君の事かと思ひました。あなたは同君を知つて御出ですか 艸々

二十日

夏目金之助

川羽田 隆様

九

一月二十日 午後零時—一時 麴町區内幸町胃腸病院より

Bai Ernu Iohelsen, Pancksstrasse 18, Göttingen 寺田寅彦(三)〔給はがき〕

ワイナハトの手紙正に拜見。面白かつた。病氣段々よろし。體重十四貫半。病院には用心のため二月迄ゐるつもり。此方の新聞は千里眼、透視、念射など原て大分賑なり。「門」一部送り候。歸りに船の中でも御讀み下さ。

一月二十日

一〇

一月二十四日

午後(以下不明) 麴町区内幸町胃腸病院より

牛込區矢來町六十二番地森田米松(四九)〔はがき〕

過日手紙にて申上たる件につき御協義原仕りたし。妥協の道あらば成案を持つて御來院を乞ふ。

一月二十四日

一一

一月二十九日

午前七時—八時 麴町区内幸町胃腸病院より

攝津國御影町前川清二氏(三)

拜啓先日御申越に相成候拙句御依頼通原稿紙に認め御送申上候兩方共認め候につき御氣に入らる方を御存しあまれるを御扯捨被下度候御氣に召し給はずは猶幾枚にても書き直し可申候 草頓首

一月二十八日

夏目金之助

前川清二様

一二

二月一日

午前十時—十一時 麴町区内幸町胃腸病院より

千葉縣成田町成田中學校鈴木三重吉(五二)

新年早々ストライキがあつた由學校の教師をすれば是から同様の事が何度となく起るものと思はなければなるまい。今は世の中の門口を潜つた許りだ。第一の經驗として興味のある事件と思ひ給へ。和尚さんが君を辭職させないのは好い。生徒を罰しないのも好い。君も平氣で居れ。此月二十六日に退院の都合、何故二十六日といふと妻が易者の所へ行つて見てもらつたのださ

うだ。夫で差支ないからうらなひの云ふ通り妻の申す通りにする積である。二三日東京は大變暖かい。暖かいと戶外へ出たくなる。 艸々

三〇

二月一日

金之助

三重 吉様

一三

二月二日 午前十時—十一時 麴町區内幸町胃腸病院より

鹿兒島市春日町百二十六番地皆川正禧へ (二九) 「はがき」

好い家に御引移のよし。此方はまだ入院中。二月二十六日に出る筈。體重十五貫弱。毎週増加の模様。是ならば當分生き延る事に候。野間君へよろしく

一四

二月一日 午前(以下不明) 麴町區内幸町胃腸病院より

牛込區早稲田南町十番地飯田政良氏へ (六) 「はがき」

長い手紙を難有う。長い手紙を書きたいが色々用事があるから是で失禮する。僕は此月末に退院する。あつたかくなると戶外へ出たい。澤山金を持って遊んで暮したい。

一五

二月二日 麴町區内幸町胃腸病院より

牛込區早稲田南町七番地夏目鏡へ (三〇)

着物と草履と雑誌は受取つた。大島の着物を不斷着にする程悪くして仕舞つたのかな。あの羽織のからは嫌だ。買ったものだから仕方がないから着る。實はドテラももう大原なしになつたよ。どうせ仕着るなら大島もよこして呉れ。

眼がまはつて倒れる杯は危険だよく養生をしなくては不可ない。全體何病なのか。具合が少しよくなつたら、よくなつたと郵便で知らせて呉れ。御前が病氣だと不愉快で不可ない。あまり天狗などの云ふ事ばかり信用しないがい。

うたひの本は病院で大聲を出して謠はれもせんから寄こしても大丈夫である。夫からはからさき一年やめろなら已めてもいゝが、やめる必要もないなら やる方がいゝ。醫者に聞いて見る。

三一

あつたかになると病院が急にいやになつた。早く歸りたい。歸つても御前が病氣ぢやつまらな
い。早くよく御なり。御見舞に行つて上げやうか。
子供へ皆々へよろしく

二月二日

金之助

鏡子どの

一六

二月三日

午前十時—十一時 麴町區内幸町胃腸病院より
府下東鴨町上駒込三百三十四番地野上豊一郎へ〔四四〕〔はがき〕

拜啓其後御無沙汰。小生豫約の謠本に加入の旨能成を通じて申込たる處其後一向音沙汰なき模
様、あとから一度に金を取られるのは恐れるが、序の時一寸幹事に聞き合せて呉れ玉へ 艸々

一七

二月四日

麴町區内幸町胃腸病院より
牛込區早稲田南町七番地夏目鏡へ〔三三〕

着物届き候。大島の衣物と下着とはよく考へると實は不用に候。然し此方へ取つて置き候。
大島の下に着る下着の胴の色あれでは羽織の裏の如く甲斐絹と同様にて見悪く候。白茶か、あ
らい模様宜した申したる積に候。

元の大島の羽織を不斷に着る程わるくなり候や。夫よりも只今着てゐる鐵色の方わるくならず
や。又不斷着ならば支那のケンドンの重い方が結構かと存候。いづれ歸つて見た上に致すべく候。
羽織の方チヨク／＼着なればあの裏にては駄目に候あれは下等な風呂敷の模様候。いつか取
り換たく候。織屋から買った糸織とかの不斷の羽織とかはどうなり候や。それへあの裏をつけた
ら好からうと存候。

謠本は病院では大聲で謠へる筈なく候。只退屈故申入候。森成さん抗議を申込み候も差支なく
候。常識なき醫者の忠告に候。取合ふに及ばぬ事に候。謠本はとぢたもの宅に餘り候を二三冊入
用と申候。以上

二月四日

金之助

鏡子殿

三三

二月九日 午前十時—十一時 麴町區内幸町胃腸病院より

牛込區矢來町六十二番地森田米松へ(五〇)「はがき」

御序の節關晴瀾氏の原稿を本人へ御返しのため、又タツミ氏に依頼されたるものを届ける爲め、社に出らるゝ前一寸御立寄願候

二月十日 午後(以下不明) 麴町區内幸町胃腸病院より

牛込區早稲田南町七番地夏目鏡へ(三三)

拜啓本日回診の時病「院」長平山金三先生と左の通り談話仕候間御参考のため御報知申上候。且那樣「もう腹で呼吸をしても差支ないでせうか」

病院長「もう差支ありません」

且「では少し位聲を出して、——たとへば謠などを謠つても危険はありますまいか」

病院長「もう可いでせう。少し習らして御覽なさい」

且「毎日三十分とか一時間位づゝ遣つても危険はないですね」

院長「ないと思ひます。もし危険があるとすれば、謠位已めて居たつて矢張り危険は來るのですから、癒る以上は其位の事は遣つても構はないと云はなければなりません」

且「さうですか。難有う」

右談話の正確なる事は看護婦町井いし子嬢の堅く保證するところに候。して見ると、無暗に天狗と森成大家ばかりを信用されては、亭主程可哀想なものは又とあるまじき悲運に陥る次第、何卒此手紙届き次第御改心の上、萬事夫に都合よき様御取計被下度候 敬具

二月十日午後四時町井いし子立會の上にて認む 夏目金之助

奥様へ

二月十二日 午後六時—七時 麴町區内幸町胃腸病院より

牛込區矢來町六十二番地森田米松へ(五一)「はがき」

風葉は謝絶になり候や。夫にて可然事と存候。つぎは貴兄御書きあるべく候。池邊氏と談合の

上必要の猶豫を得らるゝもよろしく候。先日申上候もの取に御立寄ならず。如何なされ候や。端書一枚位は書くひま有べき筈

一一

二月十三日 午前十一時—十二時 麴町區内幸町胃腸病院より

牛込區矢來町六十二番地森田米松へ〔五三〕〔はがき〕

原稿料送ルニ及バズ

衛藤東田の「新ラオコロンに就て」とか云へるもの前後三回に渡りて興の覺めたるものかな。出來得る限り以來こんなもの没書可被成候。又ロマンチズムと云ふ言葉ありやクラジックとも云ふや

一二

二月十三日 午後八時—九時 麴町區内幸町胃腸病院より

麴町區元岡町一丁目武者小路實篤氏へ〔六〇〕〔はがき〕

御目出度人御惠投たしかに頂戴御禮を申します。私は段々よろしくなります。今月二十六日に病院を出て人間界に入ります 草々

二月十三日

一三

二月十三日 午後八時—九時 麴町區内幸町胃腸病院より

本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ〔六五〕〔はがき〕

一月の *Bühne und Welt* が来た それは結構だが去年の十一月の *Deutsche Rundschau* が来たには驚ろいた。君は全體何月號迄よんだ。森田が間違へて *Neue R. S.* をたんの *R. S.* として引繼ぎ注文をしたのではないか。一寸御聞合せ申し候

一四

二月十四日 午前十時—十一時 麴町區内幸町胃腸病院より

牛込區矢來町六十二番地森田米松へ〔五三〕〔はがき〕

長耳生のカベルマン音楽會評中に曰く雀羅[○]孟求を囀るに似たりと。
雀羅とは雀を捕る網の事なるべし。アミが囀るとは不可思議千萬に候。又孟求と云ふもの見た
る事なし。蒙[○]求の誤ならん。君が書けるにや東がかけるにや。好加減な事ハヨス方ガイ、

二五

二月十七日

午前八時—九時 麴町區内幸町胃腸病院より
牛込區早稲田南町十番地飯田政良氏へ（七）〔はがき〕

御手紙拜見致候。御申越の件は至極よろしからんと存候。出來得る丈早く御取極可然かと存候。
右御返事迄。私は二十六日に退院致候

二六

二月十七日

午後二時—三時 麴町區内幸町胃腸病院より
本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ（六六）

武者小路から御目出度人と云ふのを送つてくれた。戀の進行を明らかに書いたものである。

今の作家の戀を打ち明けた^原ものは大概世にすれからした萬事を心得顔（ことに女性を）の主人
公か又は墮落生と同程度の徳義心を持った主人公である。然るに是は若い、女を知らない、相當
の考のある、純粹な人の戀を其儘書いたものである其所に價値^原がある、君讀んで見ないか、森田
の見た様に無暗にがらないから好い。

夫から鷗外から烟塵といふものをくれた。此前の涓滴といふのももらつてある。

以上三書に就て何か書くなら書いて見ないか 艸々

二月十七日

金之助

豊隆様

二七

二月二十四日

午前九時—十時 麴町區内幸町胃腸病院より
本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ（六七）

拜啓からだを大事にしろとの御忠告御尤なり、随分氣をつけてゐる積なり（笑ふ勿れ）木曜會
で菓子を食べはあの位食つても差支ないと云ふ自信ある故也否あの位儉約したつてどうせ胃はよ

くならないと云ふ信念ある爲なり、わるい信念なり出来丈撤回に力むべし

夫から別問題に就て 女に對する戀が徹底とか猛烈だとか云ふ分子さへあれば戀で、其他のわるい處があつても戀だと云ふのは勝手だが是丈が戀だと思ふのは間違だよ。

君の云ふ事は好惡の區別であつて戀になるならぬの問題ぢやない。茶が好きなものを見て何でもブランドの様にヒリツカなくては飲料でないと云ふのは可笑しいぢやないか。

武者小路のは不徹底ぢやない、あれ程徹底する事は君にや出来ない、只内氣で亂暴を働かない丈である。そこに初心の可愛らしい處があるのである。あれを眞山青果流にやつて見る猛烈かも知れないが其一面には下劣な處が出来る。

一體君は口で徹底とか何とか生意氣を云ふが其實を云ふ「と」不徹底な男である。さうして不徹底の好所を了解せぬ男である。

武者小路のヒーローに何等下劣な所ありや、たゞあゝ云ふ戀と思ふべし。戀の一種類と思ふべし。さうして其特所に同情すべし 艸々

二月二十三日夜

金之助

豊隆様

二八

三月三日 午前九時—十時 牛込區早稲田南町七番地より

麴町區九段中坂望遠館松根豐次郎へ（六六）

拜啓今夜は帝國劇場にて滿堂の紳士貴女のうちを時めき給ふらんと遙かに想像致し居候

借別紙は山田繁子さんの作の雛の俳句なるが面白いと思ふ故送る故國民に出して上げて頂きた

く候如何にや山田さんは名前丈「で」も御承知の事と存候此間來て俳句をやりたいと申せし故雛

といふ題を課したら持つて参りしものに候 艸々

二月二日夜

金

東洋城様

二九

三月三日 午後十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より

本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ（六八）「はがき」

校正の件大倉へ申遣候、猫のうちに薰風南來殿閣微涼生といふ所と應無所住生其心といふ所に誤植ある由先年申來りたるものあり此際訂正したき故其所が來たら御注意を乞(多分下卷)

四二

三〇

三月七日 午後十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より
鹿兒島市第七高等學校野間真綱へ(七〇)

病氣の折はわざ／＼修善寺迄遠路を呼び出した様にあたり甚だ濟まぬ事と思ひ居候定めて休暇中のプランが破壊された事と存候御氣の毒に存候、然しあれで死ぬとしたら一寸でも逢つて置く方が御互に好かつたかも知れず候

病氣は其後段々よろしく遂に去月二十六日退院の運に至り候間御喜び可被下候
皆川君へは別段手紙を出さぬ故君より宜敷願候何でも立派な家を借りたとかで得意の様に見受られ候が夫程立派に候や謠は不相變勉強にや小生も退院ぼつ／＼始め候今度來た時は一所に謠はうと存候皆川君のくれた臺は未だ使はず誰か來て謠ふ折には持ち出さんと構へ居候
奥さんへ宜敷、修善寺の帯は御氣に入候や 草々

三月七日

金之助

真綱様

三一

三月八日 午後十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より
牛込區辨天町百七十二番地山田繁氏へ(五)〔はがき〕

先日は失禮致しました。俳句を松根に送つ「て」やつたら大喜びで是非勸誘して作る様に盡力してくれと申して來ました。さうして何時か紹介してくれと申します。松根につらまると大變だから紹介は當分見合せます。然し句は御作りなさい。山田さんに宜敷

三二

三月十日 午前十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より
横濱市山下町六十番地ケリーウナルシ會社内久内清孝氏へ(六)

拜啓病氣中は御見舞難有候あの繪端書は大分諸方へ送り申候退院の時一寸御通知する筈でした

四三

が何しろ混雑やら落付かないやらで失禮しましたあなたのケリーウツルシにゐる事は始めて承知
しましたマードック先生の日本歴史は慥かに受取りました御手数を謝します。大變に重い厚い本
ですぬ十圓では日本ではあまり賣れないでせう紙や表装や活版はもう少しハイカラに出来さうに
思ひます

先は右御禮迄 艸々

三月十日

久内清孝様

夏目金之助

濱武からも時々音信があります此間長崎のカステラを呉れました

三三

三月十日

午前十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より

京橋區築地二丁目三十九番地松根豊次郎へ(一七)

新居の趣如何築地と早稻田にては一寸電車を利用して原も憶劫である 庭梅漸く満開春意可人君

の方の海の色は知らず、只今風邪にて鼻つまり氣分宜しからず

「門」を読んでくれるなら上げるが今は全くやり悉して仕舞つた、其後人の懇望で一二冊春陽
堂から取つた位である、君のも取るがもう少し待ち玉へ 右迄 艸々

三月十日

金

豊次郎様

三四

三月十日

(以下不明) 牛込區早稻田南町七番地より

京橋區新着町二番地大和館森次太郎氏へ(一八)

退院後別段の變化もなく無事に暮し居候御安心可被下候

蒲鉾御惠投難有風味仕候、と申して實は小生は食はず妻君及び子供が代理をつとめ候久し振りに
風邪を引いて鼻が出て頭が重くて困つて居ます 右不取敢御禮迄 艸々頓首

三月十日

夏目金之助

四五

森 圓月様

四六

三五

三月十二日 午後零時―一時 牛込區早稻田南町七番地より

本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ(六九)

校正御苦勞に存候早速御廻送致候可然御取計願候
大倉のものいびきをあくびと訓じて平氣なり、君もそれに氣づかぬ様子どうか御注意を願ひた
い、縁側は縁の字可然か 艸々

三月十二日

金

豊 隆 様

三六

三月十四日 午後六時―七時 牛込區早稻田南町七番地より

牛込區矢來町六十二番地森田米松へ(五五)「はがき」

先達て依頼せる早矢仕と武田二氏へ名刺持參の件はどうなりしや

「マードック先生の日本歴史」上下面白くなくけれど約束故稿したり御送を乞ふ。原稿は時間の
許す限り檢閲したし。その積にて願ふ。坂元のも同封にて送る。是は左程面白くなくて長さは二
段近くあるから詰めてよきや否や只今問ひ合せたり、返事來り次第面倒でも一回分に御削りを願
ひたし。先方ですめると云ふなら原稿を返してやるべし、何れとも不明

三七

三月十四日 午後八時―九時 牛込區早稻田南町七番地より

牛込區矢來町六十二番地森田米松へ(五五)「はがき」

拜啓先刻送りたる日本歴史批評は掲載の節上下とも二枚づゝ送つてくれる様配達掛へ御依頼願
候マードック先生へ送る爲に候 艸々

十四日夜

四七

三月十六日 午後零時—一時 牛込區早稲田南町七番地より

青森縣北津輕郡板柳村安田秀次郎氏へ(三)

拜啓御書面にてかねて御惠投の旨被仰越たる國光一名雪の下の一箱昨十五日午後漸く到着實はあまり大きくて嚴重に打ち付けてあるのでまだ蓋を開け不申候御心にかけれ遙々の御寄贈うれしく受納仕候御地は寒氣未だ烈しかるべく折角御自愛祈り候小生退院後さしたる變化も無之此分にてはまづ大丈夫と存じ候久しく歩行せざりし爲めあるくと足のかゝと痛み頗る苦痛を覺え候一度は北の國へも遊び御園の林檎の模様拝見致度ものと存居候がまだ仙臺以北に行く機會なくて今日迄打過ぎ申候

先は右御禮迄 草々

三月十六日

夏目金之助

安田秀次郎様

三月十七日 午後八時—九時 牛込區早稲田南町七番地より

京橋區築地二丁目三十九番地松根豊次郎へ(二)

拜啓其後は矢張御多忙にや別紙は山田の奥さん(繁子)から來たけれどもよくない、然し君もあゝ云つたものだから一應見せる、一二句でも物にしてやつては如何 原稿は面倒でも一寸返して呉れ玉はぬか 艸々

三月十七日

金

東洋城様

三月十八日 午後八時—九時 牛込區早稲田南町七番地より

千葉縣成田町鈴木三重吉へ(五)

手紙到着拜見ホト、ギスの小説は仰の如く一讀何か贊辭を呈し度と思ひしかどもあの主人

公が僕にはどうしても少年らしく受取れなかつたので其儘にせり、夫からあまり長過ぎる嫌もあるやに思つた、

僕も段々小説をかく時機が近付いてくるのに辟易してゐる何か書けるだらうかと考へる人が毎日苦しんで新聞小説を書いてゐると世間ぢや存外平氣でゐる、風葉などに對しても氣の毒である。けれども是が職業となると却つてくだらない方面から閑却される方が薩張して心持が好い場合もある

成田の文豪には驚ろいた、あの新體詩は創體として珍重すべきであらうと思ふ
近來ぐづぐづで強強もせず遊びもせず退院後は小康を貪ると申す有様自分でもいやになる事あり

右迄 艸々

三月十八日

三重 吉 様

金

東洋城築地二の三九に新宅を構ふ、まだ行かず。間數三と云ふ。狭いものならん

四一

三月十九日

午後八時—九時 牛込區早稲田南町七番地より

本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ(セ〇)「はがき」

文藝欄編輯の件と小説原稿料の件に付ては懇々森田に話したる事あり、其懇々が未だ君に傳つてゐぬためあんな長い手紙を書く必要が起つたのぢやないか、もう一遍森田に會見して僕の意志を聞いて見給へ、うちへ來れば僕が話してもよし。

森田が小説を書き出したら編輯を君がする事森田にも僕にも便利也。たゞし(報酬問題としてなら猶相談の餘地あらん)手紙にてすぐ確定しがたし

四二

三月二十一日

午後二時—三時 牛込區早稲田南町七番地より

札幌北六條西七丁目八番地山内義人氏へ(二)

拜啓去年は橋本君を通じて玉稿をわざ「〱」御送相成候處多忙やら病氣やらにて思ひながらついで其儘に打過候處に又々御新作御寄贈に相成狼狽致し幸ひ目下小閑あるを機として早速年

賀状丈を拜讀致しました

諸其所感を無遠慮に申上ますとあれはまだ公けに出来る程成つてゐません。元來黒人のかくものは巧でも黒人臭いいやな所があります。其意味からして黒人離れのした様なナイーヴなものは大に珍重可致ですが、御作には此黒人離れのした素人としての好處がありません。中にはちよいちよい面白いと思ふ所もありますが手紙では悉せま「せ」んから申上ません。

失禮だけでも御忠告をしますが、もつと短かいものをもつと念入にかいたら（御作は書きなぐり過ぎます。餘計な批評などが澤山這入つてゐます）何うですか。夫でなければ北海道邊で丸で内地人に知られない珍しい景色や人情や風俗の寫生を御やりになつては如何ですか。小説にしゃうとなさるから黒人離もしない上に素人臭いものも出來上るのですが小説杯といふ色氣を離れてたゞ事實のうちで面白い事、愉快な事、珍らしい事、種になりさうな事を平生御見聞の裡から御書きになつたらと思ひます。玉稿中にある犬の事に關するゲーテの詩の譯の所など即ち其一部であります。あれは作つたつて一寸出來やしません。（たゞ何とか云ふ助教をあゝ頭からチヤカシて書かないでもつと眞面目に御遣んなさい。たとひ批評をしてももつと本式に御遣りなさい。）

まだ申上る事はありますが長くなるから休めます。あれ丈の長いものを書く努力は大變です夫を一言にケナスのだからケナス方も心苦しいのであります。たゞ未來の御參考の爲と存じて失禮

を申上ます。御赦を願ひます

東京邊の雑誌に載る小説も御參考になります。ひまの時御讀になる事を希望します 艸々

三月二十一日

夏目金之助

山内義人様

病中は寫眞繪端書等御親切に御送り下さいまして難有う存じます序と申して失禮ですが茲に改めて御禮を申上ます。橋本君にも宜しく願ひます

四三

三月二十二日 午前十時—十一時 牛込區早稻田南町七番地より

牛込區矢來町六十二番地森田米松へ（五六）

小宮が君の代りに文藝欄をやる事を社に話してさうして君の小説を獨立した人間のそれと同價に買ふ事を僕は決して拒んだ事はない、否寧ろ僕の方からさうしたら何うだと云ひ出した位だ、さうすればたゞ必然の勢君が小説を濟ましてから又もとの文藝欄に立ち戻る事が不慥になる（む

しろ出来なくなる)と云ふ危険がある丈である、此危険を冒す氣なら僕は君の原稿を五圓で買つてやつてくれと社に要求しても宜いと小宮に云つたのである、それが否なら文藝欄に關係をつけて置いて原稿料を少なく貰ふより外はあるまい、

小宮は何うしても先生を承知させると云つたとか、さうして僕の前では丸で理窟らしい事は無論、殆んど何も云はなかつた、それなら分り切つた事を繰り返して押し懸ける必要もなさうなものだ

君は僕の意に従ふといふ、それは難有い、然し君も小宮も僕の云ふ事を尤もとは口外しない、たゞ僕の云ふ事でそれに背けば今の處物質的に損だからまあ云ふ事を聞かうと云ふ様な調子に見える、僕はいやだね、人を強るのは否だ、僕が無理を云ふなら抗辯しても構ない、此際已を得ないから感心はしないが意に従つて置かう杯は甚だ癪だよ 艸々

米 松 様

金之助

四四

三月二十四日 牛込區早稲田南町七番地より

内田榮造へ(三)

拜啓先日病院へ御光來被下候時は臥床中とて甚だ失禮申候其後病勢漸く退却去月二十六日退院の運に至り候間御安心可被下候

偕御惠投のインベの茶器一組正に到着難有御禮申上候わざ／＼小生の爲に御求め御國元より御持參被下候趣一層嬉しく候不取敢御挨拶迄 艸々

三月二十四日

夏目金之助

内田榮造様

四五

三月二十七日

午後三時—四時 牛込區早稲田南町七番地より

麴町區内幸町胃腸病院内森成麟造氏へ(二)「はがき」

拜啓二十九日に杉本さんを新橋迄送つて行かうと思つてゐましたが朝早くて時間の都合が少々困るのでとう／＼失敬する事に極めてしまひました。夫で甚だ申譯がないからあなたから何うぞよろしく願ひたいのです。杉本さんの健康と成功を祈る旨を御傳下さい

三月二十八日

午前十時—十一時 牛込區早稻田南町七番地より
本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ（七）（はがき）

○眼を白黒くする（濁らず）

東京語

○心が晴々する

東京語

○青軸

梅の一種 東京語か

右御返事迄 艸々

三月二十八日

三月三十日

午前十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より
府下大久保仲百人町百五十六番地戸川明三氏へ（一三）

拜啓退院後一寸御禮の爲め參上可致の處あたかも身體も自由にならず未だに失敬致居候

借御存じの文藝欄につき又々責任相生じ原稿は時間の許す限り一應眼を通す事に相成候昨日森田より玉稿廻送拜見致候あゝ云ふ文教上の時事問題を一束にして短評を時々試むるのは至極よろしき思付と存候があれをもう「少」し刈り込み度候が如何にや刈込み方御任せ被下るゝ譯には參りかね候や伺ひ候、尤も御主意は改めぬ積に候たゞし最初の文部省が器量をさげたとか癢に障るとか申す言葉は博士問題の相手たる小生の關係する朝日文藝欄として當局者と喧嘩を始めぬ限りちと差し控へたい心持が致し候、其他はたゞ御要旨を存し一回分位につゞめる丈に候、夫から愚翁は御本名にては御差支有之候や是も序に一寸伺上候
漸々好い時候に相成候目下試験休みにて御閑散と存候ちと御出掛の程待上候先は右御伺ひ迄
艸々敬具

三月三十日

金之助

秋骨先生

三月三十日

午前十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より

牛込區市ヶ谷左内坂町橋口清氏へ（二八）

拜啓退院以後一寸御禮に上る覺悟の處今に愚圖々々致居候御免可被下候

此頃懸物を一二幅表装したいと思ひ候が經師屋を知らないので困ります近所か區内に信賴すべきもの有之ば御教示を願度と存候固より千古の名幅でも何でもないから非常の名人に頼む必要は無論無之候たゞ相應のものを心懸候御心當りもあらば御返事願上候 艸々

三月三十日

金之助

五葉先生

四九

四月一日 午前十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より

牛込區矢來町六十二番地森田米松へ（五七）「はがき」

秋骨氏曰く加筆しても構はんと、然るに原稿を君が持つて歸つて直す事が出来ない、持つて來てくれ、秋骨氏のも「門」の批評でも置いて行けばいゝのに持つて歸つたつて何にもならんぢやないか

五〇

四月二日 午後零時—一時 牛込區早稻田南町七番地より

府下西大久保百五十六番地戸川明三氏へ（二〇）「はがき」

拜啓御許諾を得て玉稿に手をかけ出しました處中々思ふ様に參らず、仕舞には小生にもあきたらず大兄にも面白くないものが出來上りさう故とう／＼思ひ切つて已めてしまひました。おもちゃにした様で甚だ濟みませんがどうぞ御許し下さい、

あなたの文章は御ひやかしの言葉で充滿してゐます、夫をもう少し穩やかにしやうと思ふととても出來ない、根本が違つてゐるので失敗したのだらうと思ひます、他日御目にかつて御詫を致します

五一

四月五日 牛込區早稻田南町七番地より

拜啓玉稿到着拜見致候今度のは前回よりも數等出來よろしく面白く拜見致候

然したゞ面白く拜見した丈では不可ないからどこかへ公けにしたいとも一方では考へ候が此頃雑誌の原稿は諸方とも堆積の模様にて撰澤も一時よりは大分嚴密になり候故急にどうなるやそこは小生にも心配かつ(こんな事を申上ては失禮なれど)原稿料が取れるか取れないか疑問に候故少々躊躇致候次第に候

雑誌と申したればとて小生の間接に知るは一二に過ぎず候へども以上の事情御承知の上は一應相談致して見る考に候尤も大兄の方より何の御依頼もなきに差出がましき事を致し失禮なれど其邊は御容赦にあづかり度候又出なくても御勘辨を願ひ候最後に出ても金になるかならないか分らないと覺召し被下度候

何れとも其内御報知可致候 艸々

四月五日

山内義人様

夏目金之助

五二

四月九日

午後(以下不明) 牛込區早稻田南町七番地より

和歌山縣新宮町佐藤豊太郎氏へ(二)

拜啓春暖の節愈御多祥奉賀候陳ば昨日八日生田長江君來訪御惠贈にかゝる奇品二點正に拜受致候遙々の御厚意一層難有存候石も牙も共に机上に据朝夕愛撫不淺候

長江君よりの話にて拙筆御所望とやら承知致候書と申すものを習ひし事なき小生に取つては甚だ困難に候へども從來色々の關係上已むなく悪筆を揮ひ候機會にも乏しからず貴所のみ對し御辭退申上る必要も無之下手を御承知の上なれば何なりと認め御送り可申上につき何なりとも仰聞られ度候

先は右御禮迄 艸々

四月九日

佐藤豊太郎様

夏目金之助

四月十日 午後（以下不明） 牛込區早稻田南町七番地より

府下巢鴨町上駒込三百三十四番地野上豊一郎へ（四五）〔はがき〕

森成さんが歸國するにつき十二日午後三時から拙宅で肝臓會を開く御都合の上御出席を乞ふ寫眞を撮るつもり御馳走といふ程のものなし 艸々

四月十日

四月十一日 午前十時—十一時 牛込區早稻田南町七番地より

本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ（七三）〔はがき〕

拜啓明十二日の肝臓會は午後三時からに致し候故其積で御出を乞ふ。時に寫眞を記念に撮る積故望月でも九段の長谷川でも頼んで同刻に連れて來て呉れ玉へ。大きさは不明なれど餘り大いと保存に不便ならん

四月十四日 午前十時—十一時 牛込區早稻田南町七番地より

府下巢鴨町上駒込三百三十四番地野上豊一郎へ（四六）〔はがき〕

拜啓玉稿落手致候前半は出來得るならば少々つゞめ度考に候。何れにしても機を得て掲載可致候 艸々

四月十四日

四月十五日 牛込區早稻田南町七番地より

麴町區内山下町一丁目一番地東洋協會内森次太郎氏へ（九）

拜啓不折の馬今度は出來損ひ申候よし畫の方は何時でも相應には行くものとのみ思ひ居候ひしが左様旨くも參らぬものと見え候

日本橋の贊其内どうか片付可申候近頃は詩を作る氣分もなく候故何時出來るか一寸御受合は致しかね候故其邊は御海恕願候

時につかぬ事を伺ふ様なれど大兄御編輯の雑誌に何か下働でもする男一名御入用には無之や實は頼まれて氣の毒にもなりし人一名有之東洋協會雑誌の編輯の下働きといふ事を一寸思ひつき突然ながら伺ふ次第に候が御迷惑ながら一言御様子御洩し被下候はゞ幸に候 右迄 艸々

四月十五日

夏目金之助

森 次太郎様

五七

四月十七日

午前六時—七時 半込區早稻田南町七番地より

本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ(七三) [はがき]

拜啓銅牛の後には今日の音楽評を載せたく候故右御含み置被下度候
順序は戸川、銅牛、音楽、四郎に候

五八

四月十八日

午前十時—十一時 半込區早稻田南町七番地より

本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆室鈴木三重吉へ(五四)

拜啓只今歸宅電報披見

敏君は十五日に西京に歸れる筈もし居れば下谷練塀町(壹丁目?) 齋藤方なり電話帳にて御確め可然候

敏君は十五日に歸ると云ひし故電報の返事を出す程急がないでもよいと思ひ速達にて用を辨じ候 艸々

四月十八日

金之助

三重吉様

五九

四月十九日

午後五時—六時 半込區早稻田南町七番地より

本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ(七四) [はがき]

御不平御尤に候。然し越後記と南歐の何とかいふものと文藝欄を脊負ひ込んだページだと思つ

て見ればまあ仕方がない。あれでも佐藤は充分骨を折つた積かも知れないよ。呵々。僕は柏亭の様な記事の出るのを喜ぶから柏亭を壓しても文藝欄で幅を利かさうといふ氣はない。たゞし上下をきるのはよくないが、そんな例はいくらもあるのだらう

六〇

四月二十三日

午後十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より

本郷區森川町一番地蓋平館支店鈴木三重吉へ (五五)

上田敏氏よりの返事届き候故御送申候京都へは〇〇〇〇が參る事になりたる由につき多分斷りの手紙なるべく候

右につき〇〇の今迄の口海城中學二十五時間にて四十圓はち「と」悪き方なれど此際是非にと思ひ〇〇氏に依頼致候處早速引受明二十四日午後五時頃君の所迄行く筈につき御面會の上御相談可然候、もし會へなかつたら君の方から御出向き御面會可然候同君番地は本郷森川町一番地橋下三八六月岡方に候
右用事迄 艸々

四月二十三日夜

金之助

三重 吉祥

六一

四月二十四日

午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より

本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ (七五) 「はがき」

今日文藝欄やすみにつき音楽評間に合ひ候ば白川の前に出したく候。尤も明日白川の「上」が出れば已を得ねど明日も文藝欄休みなら左様御取計願候。檢閲は宜敷願

六二

四月二十四日

午後六時—七時 牛込區早稲田南町七番地より

府下巢鴨町上駒込三百三十四番地野上豊一郎へ (四七) 「はがき」

拜啓昨日は子供難有う過日の寫眞出來につき本曜にでも遊びながら来て下さい 艸々

四月二十四日

四月二十八日

午後零時—一時 牛込區早稲田南町七番地より

本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ(七六) [はがき]

五葉氏未だ在京のよし太平洋畫會の批評依頼方御世話被下度候。序に小杉の畫と満谷の景色畫に就て特に同氏の意見を聞かれたし 艸々

カフエー・プランタンといふ伊太利料理を食はす處京橋日吉町に出來たり。知るや否や。

四月二十九日

午後二時—三時 牛込區早稲田南町七番地より

本郷區森川町一番地蓋平館支店鈴木三重吉へ(五五)

拜啓手紙の事承知致候小生の口添如何程の功力あるやは計られねど了信坊とは知り合故一書を裁し御周旋可申候もしどつちか口が餘つたら野村、野上のうちへ廻してやつて呉れ玉へ、

野村はまだ引き受ける時間あるべし 昨日宅へ行つたら氣の毒になつた

野上も學校があれば雜誌をやめたいと云つてゐる、此間も敏君に京都を頼んだらしい 艸々

四月二十九日

金之助

三重 吉様

四月二十九日

午後十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より

麴町區三宅坂陸軍衛戍病院中勘助氏へ(二)

拜啓本日野上白川より承り候處大兄御病氣にて目下御入院中の由御重態には無之るべきも随分御加養の上一日も早く御出院の程希望致候

小生病中はわざ／＼御見舞をいたゞき候處其後どうかかか本復目下は歸宅諸方飛び廻り居候につき御安意被下度候右御見舞の序に申上候

かさねて精々御養生御全快を只管に祈り申候 艸々

四月二十九日

中 勘 助 様

夏目金之助

七〇

六 六

五月五日

午後八時—九時 牛込區早稻田南町七番地より

常陸國筑波町小林修二郎氏へ

拜復御手紙拜見致候處何か御國許に御變事ありたる御容子たゞ／＼痛嘆の至深く御同情申上候
此際可成身體御大事に御攝生可然追つて萬事御濟御上京の節は又御目にかゝり可申候先は不取敢
御弔詞迄 艸々

五月五日

小林修二郎様

夏目金之助

六 七

五月六日

午前十時—十一時 牛込區早稻田南町七番地より

本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ (七七) 「はがき」

御房さんの式は午前十一時のよし故右一寸御通知申上候也 艸々

五月六日

六 八

五月十日

午後八時—九時 牛込區早稻田南町七番地より

和歌山縣新宮町佐藤豊太郎氏へ (三)

拜啓過日御依頼を承りてより荏苒延引申譯無之漸く拙筆を揮ひ了り候間小包にて御目にかかけ候
墨薄く色あしく候へども御勘辨被下度候
先は右迄 艸々拜具

五月十日

夏目金之助

佐藤豊太郎様

七一

五月十日 午後八時—九時 牛込區早稲田南町七番地より

攝津國御影町前川清二氏へ (三)

拜啓其後は御無音に打過申候借先般御依頼の半切の件にて失敗致候てより以來日々違約の意を行はず今日迄放抛致候段眞に申譯なく候此間中小閑を偷んでやうやく認め小包にて差出候間御受取願候右用事迄申述候 草々頓首

五月十日

夏目金之助

前川清二様

五月十二日 午後三時—四時 牛込區早稲田南町七番地より

高田市横町森成麟造氏へ (三)

拜啓高田の横町に火事があつたといふ事を始めて聞きました。みんなが森成さんは焼けやしな

からうかと心配して居ます。坂元は御見舞を出したさうですが御返事がないさうです。横町といふ所はどの位廣い所か分りませんが高田の事だから狭いのだらうと云ふ評判です。其狭い町内から火事が出たんだから森成さんの家も助からなかつたらうと云ふ結論です。私は此結論がどうぞうそであれば可いと願つてゐます

後れながら右御見舞迄申上ます 艸々

五月十二日

夏目金之助

森成麟造様

五月十二日 午後三時—四時 牛込區早稲田南町七番地より

本郷區駒込西片町十番地畔柳都太郎氏へ (二六)

拜啓此間一寸御尋したら御留守で残念でした。此頃新聞で見ると山形が大火で全市悉く烏有に歸すと云ふ様な凄い事が書いてありますがあなたの家も多分焼けたんぢやないかと思ふと甚だ驚ろかれます或は屋敷町かないぞで助つたら夫こそ結構に存じます。もう當分櫻ん坊も頂けない事

と諦めます。少々後れましたが御見舞迄に一寸申上ます 艸々

五月十二日

七四

芥舟先生

金之助

七二

五月十二日 牛込區早稲田南町七番地より

在英國倫敦大谷正信氏へ(三二)

此間は長い御手紙を難有う御座いました。私は御音信をしやう／＼と思つてゐながらついでに御無沙汰をします、病後はことに疎慵になりました。御ゆるし下さい。バイブルの展覽會は面白う御座いました。センサスの件は噴き出しました。アタランティンカリドンの評はタイムスで見ました。あの評はよかつた。タイムスの文藝評は時としてくだらないのがありますが、あの評は頗よかつた様に思ひました。

東京も變ります、あなたが歸る頃にはまだ變ります。何しろ電車といふ怪物が出来て凄まじい勢で方々の往來を破壊して行くのだから堪りません。此間帝國劇場と云ふ芝居が出来て開場式に

招かれました。立派な建物です、西洋のと變りません、八十萬圓程かゝつたさうです。此二十頃頃から一週間ばかり坪内さんの文藝協會でハムレットをやるさうです。私は優待券をもらひました。本所の牡丹、大久保のつゝじ、堀切の菖蒲例の如くであります。吉原は此間丸焼になりました。近來にない火事でした。それを明る日迄知らずに済済まして居たのだから東京は廣いに違ありません。二三日前は山形市が丸焼になりました。戸川君は謠をうたつてゐます、四方太も謠ひます、私もやります。大分流行します。

あなたの碁のレクチュアも新年の舞踏會も讀みました。孰れも面白う御座いました。近頃は小説だの文學が下火になりました。小説杯は大いに賣れないさうです、私のも前に比べると賣れなくなりました。虚子もホト、ギスの維持と發展で苦心してゐます。

文藝院と云ふものが立つさうで文部省では文藝委員を選定中であります。妙に入り亂れた顔觸が出来たらうと思ひます。

先達ての御通信を朝日の文藝欄へ半分程頂戴して載せました。バイブルの事は原語が多過ぎるから省きました。

寺田に御逢ひになつたら宜敷仰つて下さい。以上

五月十二日

金之助

七五

大谷様

十六

七三

五月十四日 午後五時—六時 牛込區早稲田南町七番地より

本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ (七三) 「はがき」

昨日の原稿たしか「中」の處に文士を救濟の文句あり救濟ぢや貧乏人か焼出された貧民の様で
わるいから保護とか何とか直して置いてくれ玉へ 以上

五月十四日

七四

五月十五日 午後(以下不明) 牛込區早稲田南町七番地より

京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内杉村廣太郎氏へ (四)

拜啓うちに送つて來る「英語青年」と云ふ雜誌を見たら君の東湖書簡集の評註があつたので、
此前も讀んだから此度も讀んで見た。所が第一のパラグラフの仕舞に *so much for Sugimura.*

と云ふのを君は譯して杉村ならやりかねないことだと書いてゐるが、あれは間違つてゐやしない
か、「杉村の事は此位にして置かう」即ち是から後は自分の事を述べると云ふ意味だと僕は思ふ。
英語青年といふ雜誌はこんな事を詮議して八釜しく云ふ雜誌だから一寸御注意をする。此つぎ
の號に正誤し玉へ。僕は慥かにさう解釋する方が正しいと思ふ。尤も念の爲だから外の人にも聞
いて見給へ。 匆々頓首

五月十五日

金之助

楚兄

七五

五月十八日 午前十時—十一時 牛込區早稲田南町七番地より

京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内杉村廣太郎氏へ (五) 「はがき」

君はとうとう女の贊成者を生捕つたが僕は敢て抗議を入れる。あの *Alas!* と云ふのはね、『杉村
に就てもつと *credible* な事を云ひたいが、御氣の毒だが、嗚呼是より外に一寸かく事がないか
ら、泥棒事件丈で御免蒙る』と云ふ意味なんぢやないか。尤も *Sugimura* ノ下にある變な棒(ダ

七七

ツシ?)は少し胡亂だ。何の爲とも見當がつかない。
ロイドが何とか云つて來たら一寸教へてくれ玉へ。ルースの妹のバラフレーズは何だか胡魔化
しの様な氣がするよ。どうもあゝバラフレーズする根據が分らない。或は彼の女が君に御覺召が
あつて、ことさらに君の意を迎へるんぢやないかな。萬歳!

七六

三月二十日 牛込區早稲田南町七番地より

京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内杉村廣太郎氏へ(カ)

さう女軍を引率して遣つて來られては降參だ。若しやと思つて手近にあるものを調べて見たが
どうも君の云ふ様な意味の物を見出し得ない。ロイドは男だから僕に賛成するだらうと思ふ。
萬一ロイドが女の肩を持つたら仕方がない、僕がわるいと仕様、其代りロイドの説明を教へて呉
へ玉へ。

—— So much for him.

Now for ourself and for this time of meeting:

Thus much the business is. ——

是はハムレットの始めの方にある。今頃沙翁などを引いて議論でもなからうが、あんまり淋し
いから横へ書いて景氣を添へた。尤も僕の意味を確める丈で外に何の役にも立たない。

金之助

楚 兄

御葉書は二枚同封で御返しする。もし僕が負けたら其始末を堂々と英語青年で發表するの
かな。ひどいなあ。僕は勝つた時丈引き合に出してもらひたいなあ。

七七

五月二十日 午後十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より

本郷區森川町一番地橋通須田方林原(當時岡田)耕三へ(二四)

若いうちから君の様に弱くつては駄目だ。からだの弱い人は弱いなりに人一倍用心をして比例
を保たなくてはならない、人並にしては弱る丈だ。精々注意して身を殺さないやうにし玉へ。僕
は小樽の火事で内々心配してゐたが君の手紙には何ともないからまあ無難なのだらうと思つてゐ
る。鈴木の澁谷の宿所は下澁谷七四廣尾橋下車祥雲寺墓地の横といふ所だよ。

右迄 艸々

五月二十一日

八〇

金之助

耕 三 様

七八

五月二十一日 牛込區早稲田南町七番地より

京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内杉村廣太郎氏へ(七)

拜啓ロイドの解釋拜見。ロイドの引用した句は自分の説の出處を示した丈で、其自分の説はまあ僕と同様なのだから、あの句を君の様に取るのはロイドの意ではなからうけれども、多少は君の意義も含んで居ない事もないから、前後の關係から調べて見やうと思つてヘンリ八世を見たが、あの句は見當らなかつた。

尤もあの場合に君の意味を含んでゐると云ふのは、首を斬る制裁が Buckingham の方へ向ふのだから so much for B の for に意味があるが、so much for Bugimura の場合には、action が杉村に向つて (for) 働らさかけるのでなくつて、杉村自身が action の張本人なのだから for の意

味が全く變になる。ルイスのバラフレーズが根據がないと云つたのは此が爲だつたのだよ。

尤も議論しなくつても慣用上さう使つてゐる例が澤山出れば夫迄なのだけれども、さう云ふ例は恐らくなからう。

五月二十一日

金

楚 兄

七九

五月二十一日 (以下不明) 牛込區早稲田南町七番地より

埼玉縣南埼玉郡鷲宮村川羽田隆氏へ(三)

拜啓御手紙拜見致しました。新緑の時節で當地も幾分か暢適の心持が致します。田舎の生活は嘸かしだらうと想像致します。

文藝欄は近縣の地方版には出ない事になつたさうで夫は私が入院中の事でちつとも知りませんでした。何でも市内版のほいものには社から直接に市内版を送るといふ社告を出したとか聞きました。なんなら社にさう云つて市内版を御取りなさい。さう云ふ人さへ澤山殖えると地方版に

八一

も文藝欄を抜かない様になるでせう

先は御答迄 艸々

五月二十一日

川羽田 隆様

夏目金之助

八〇

五月二十一日 午後八時—九時 牛込區早稲田南町七番地より
麴町區富士見町二丁目三十二番地安倍能成へ (三)

拜啓玉稿落手致候然る處あれは餘り六づかしくて専門的な所があるのと、又梗概としては勃率に過ぎて滋味に乏しく哲學雜誌の紹介の如き故も少平たく且趣味ある様に書き直すか又はオイケンでも好いから外の問題で書いて被下間敷や原稿は小宮が持つて歸り候同人から御受取願候 勿々

五月二十一日

金之助

能 成 様

八一

五月二十三日 午前十時—十一時 牛込區早稲田南町七番地より
本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ (七九)

啓帝國劇場から招待が來たから封入して上げる氣が向いたら行つて御覽、僕は昨夜見た、遅く行つて早く歸つた、つまらなかつた、右迄 勿々

五月二十三日

金之助

豊 隆 様

八二

五月三十日 牛込區早稲田南町七番地より
京橋區築地二丁目三十九番地松根豊次郎へ (二九)

拜啓雅樂演奏の招待状正に拜受難有候
御手紙には七月三日とあれど招待状には六月三^原なり七月は多分偶然の書き損ならん
服装の儀は紺などの脊廣にてはあしきや一寸伺ひ候
可成君も御出ありたく候 艸々

五月三十日

金

豊次郎様

八三

六月九日

午前五時—六時 牛込區早稻田南町七番地より

本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ(八〇)「はがき」

カツテ正誤を頼んだ所は

○薰風南より来て殿閣微涼を生ず(殿角は誤)

○應無所住而生其心(應無の二字の所が何とか顛倒してゐる由(而は入れても入れなくてもよし)

八四

○懸崖に手を撒(サツ)して(向ふの校正の通り撒にあらず)

八四

六月十六日

午前十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より

本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ(八一)

又々柏亭の美術博覽會が参り候尤も僅か二回故出して仕舞ふ事に取極め候。其他に關晴瀾の彫
刻物の審査に就てといふのが一つ参り候是は小生手を入れて出す事に致候右御含迄に申上置候
其他歸る迄に相談しておく事はなさま様に存候 勿々

六月十六日

金之助

豊隆様

八五

六月二十二日

午後二時—三時 牛込區早稻田南町七番地より

八五

拜啓今回は不圖高田へ御邪魔に出る氣になり思ひも寄らぬ御迷惑を不時に相掛まことに申譯無之ことに招魂祭で旅宿が塞がつてゐた爲御宅にづうしく寐泊りをして新婚早々の令夫「人」を驚ろかし奉り實以て相濟まぬ儀と心中大に慚愧を感じ居候

生憎雨が降つて町内の見物も思ふに任せず佗びしい高田のみを記念として立去るべく餘儀なくされたのは返すく遺憾です、高田で私の氣に入つたのは紅葉の垣であります、それから和倉樓の座敷の構造の昔し風に現代を超越してゐた事です、あすこで御湯に入つて十五分許寐た時は實際いゝ心持でした。願くはあの部屋で春の海のもの「り」くする有様を見たいと思ひました。諏訪の牡丹屋といふ家は好い宿です、湯槽が大理石で甚だ心持がよう御座いました。

奥様へどうぞよろしく願ひます。御とつさんが御出ならば亦可然敬意を表して置いて頂きたい。あなたの護謨輪と御とつさんのつんつるてんの絆と比較すると矛盾を感じない譯に行かないですな

田川校長と菊池校長へは別に禮狀を出さないからあなたから宜敷願ひます、武田君には一寸書きます

先は不取敢御禮迄 艸々頓首

六月二十二日

夏目金之助

森成麟造様

八六

六月二十二日

午後(以下不明) 牛込區早稻田南町七番地より

京橋區築地二丁目三十九番地松根豊次郎へ(三〇) 「はがき」

昨夜歸京越後高田直江津迄參り歸りは諏訪甲府經過からだは旅の方よろしく候、木曾へ廻らぬが残念に候

八七

六月二十四日

午後四時—五時 牛込區早稻田南町七番地より

本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ(八三) 「はがき」

美學會の時日刻限差支なく候、端書の尻尾を見なかつたものだから問合せの書面と思はず、通知の書面と思ひ今日迄返事を出さずに居候 失禮

六月二十四日 午後四時—五時 牛込區早稲田南町七番地より

麴町區飯田町九段中坂望遠館津田龜次郎へ(二)

拜啓一昨日は失禮其節御話の事今日社に相談して見た處挿畫の需用ある趣故大兄の事申入候。

あなたの畫を三四枚(種類の異つたもの一枚づつ、精密なるもの疎なるもの等)至急京橋區瀧

山町四朝日新聞内瀧川柳次郎宛にて御送被下度候

瀧川氏は其儀につき一覽の上適當と認むるならばかう云ふ種類とかあゝ云ふ種類とか指定して改めて御願致す筈に候

右用事迄勿々申上候 以上

六月二十四日

津田青楓様

夏目金之助

六月二十四日 午後四時—五時 牛込區早稲田南町七番地より

清國湖北省沙市日本領事館橋口貢氏へ(二四)

拜啓其後乍存御無沙汰に打過候處愈御清勝御勤務奉賀候小生不相變無異消光乍憚御休神可被下候

清君には毎々書物の意匠で御厄介に相成居候同君より時々大兄の御近況を聞知致し居候風流の本家の事故書畫文房具の類は定めて御手に入る事と存候御歸京の日は拜覽の榮を得度と存じ只今より樂み居候

却說楚國擲英なる見事の書畫帖忽然御寄贈を受け驚喜不斜日々机上に載せ展玩致居候扇の恰好を其儘張り込んだる處から扇の地が古色蒼然と時代づきたる處に裝潢の白紙が如何にも美事に映り合ひて一種の雅趣を添へ申候、小生はあんなものが大好き故非常に嬉しく候右早速御禮迄申上候段々夏になり暑く候随分時候を御厭ひ被成度候 艸々頓首

六月二十四日

夏目金之助

橋口貢様

七月一日 午前十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より

本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ（八三）〔はがき〕

拜啓自然主義の觀察によれば明日は計畫通り玉川へ參る事覺束なき模様候。其準備として他の方法御一考置願度候。

（拙宅に御出無論差支なし。たゞ拙宅にてどんな事をしてどんなものを食ふかの準備也）

七月五日 午後十時 牛込區早稻田南町七番地より

本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ（八四）

拜啓別紙の如き書面只今到着致候明日に間に合ふため早速車夫に持たせ差出候間どうぞ宜しく願候

こんな間違はある筈がないと思へども小生は君が悪いのか社が悪いのか分らず候もし君がわるいなら御氣をつけられ度候 早々

七月五日

金之助

豊隆様

七月十日 夜 牛込區早稻田南町七番地夏目邸に置き手紙

小宮豊隆へ（八五）

拙稿一つかく筈の處差支ありて不果候野上の挿畫の批評と樂堂の俳論と二日分御送り置願候
今夜はケーベル先生方へ參り候

七月十日

金

蓬梨雨先生

七月十一日 午前十時—十一時 牛込區早稲田南町七番地より

麹町區富士見町二丁目三十二番地安倍能成へ(四)

拜啓昨夜は難有う。西洋の例によると御馳走の翌日は名刺を持つて門口迄御禮に行くのが禮式
ださうであるが昨夜のは正式の招待でもなし、ケイベル先生もそんな面倒な事を意とするたちで
なし、第一此炎天に駿河臺迄名刺を持つて行くのも降参だからやめにする、どうか久保君から宜
敷先生に云つてくれる様にたのんで呉れ玉へ
昨夜も話した通僕の家が洋式に出来てゐると先生を招待したいのだが椅子もテーブルもないの
だから已を得ない。

久保君にも色々御世話になつたから君から宜敷願ひます 勿々

七月十一日

夏目金之助

安倍能成様

七月十四日 午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より

本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ(六六)

拜啓別紙は齋藤與里よりの寄稿なるが已に白川ものを載せたる故重複も面白からず君の御配慮
により國民か讀賣へ依頼致度御面倒ながら御紹介願候

原稿はどうか〜なるべく候、大阪より過日の演説をつゞきものに纏めてくれと申來候に少々
恐縮致居候 勿々

七月十四日

金之助

蓬梨雨先生

吉エモンとか申すもの暑さの砌故成るべく中らぬ様あつさり願候

七月十七日 午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より

長野縣諏訪郡豊平村二十九番地永田登茂治氏へ(二)

御手紙拜見致候子規の遺墨御入用の儀御申越相成候故篋底相調べ候處悉く小生宛のものみにて小生以外のものが所持致し居りても何等の意味もなきものに候せめて俳句にてもと存じ短冊を探し候處僅かに二葉を存し候も是亦小生を送る句にて候

右の次第折角の御懇望御氣の毒とは存じ候へども割愛致しかね候故不惡御了知被下度候
諏訪にては拙講御聽被下候由御芳志奉謝候先は右御返事迄 勿々

七月十七日

夏目金之助

永田登茂治様

九六

七月二十八日 午後六時—七時 牛込區早稲田南町七番地より

相模國鎌倉由井ヶ濱小林別荘菅虎雄氏へ(二三)

先達て御訪問の時は長野迄旅行してゐて失禮した、此間一寸鎌倉迄呼ばれてゐつたが、君の家

を尋ねるひまがなかつたのでとうとう夫なり歸つて來た

此間のあらしは鎌倉も大分損害があつたさうだが實は君の家の事も虚子の家の事も忘れてつい見舞もせず打過ぎて甚だ相濟まん、大した事もあるまいが海岸丈に氣にかゝるとどんな模様かね 勿々

七月二十八日

金之助

虎雄様

九七

七月二十八日 牛込區早稲田南町七番地より

宮本叔氏へ

拜啓其後は御無沙汰暑さの砌御變もなき事と存じます、楮小生の知人にて社會學專攻の文學士小林郁と申す人此度廣島高等師範教授を辭し米國シカゴ大學へ研究の爲め參る事になりました處本人事昨年末腸チフスに罹り其後回復は致したれど全然平生の健康と申す程に行かず従つて長途の航海風土の變化につき多少の心配を抱きて此際大兄に一應診察を願ひ猶養生法等篤と承はり置

九五

度故紹介をしてくれとの依頼あり、御多忙中御迷惑とは存じますが、もし御暇もあらばどうぞ御會ひ下さい、又御差支の折は時日を期し御呼寄せ下さい、甚だ勝手な事を申上て済みませんが宜敷願ひます

七月二十八日

夏目金之助

宮 本 様

九八

七月三十一日 午後零時—一時 牛込區早稻田南町七番地より

福岡縣京都郡犀川村小宮豊隆へ（八七）

御注文にて吉右衛門論なるものを早速拜見致候。大分骨の折れたものと思ふ。なぜ骨が折れたらうと讀者に思はれるかと云へば徹頭徹尾緊張してゐるからである。さうして至極徹底してゐるからである。かう云ふと君の目的通り讀者の眼に映つたといふ事になつて君は満足だらう。君は君の遣つた仕事に對して満足して然るべきである。

けれどもあの緊張はね、内容の充實から來たといふより寧ろ態度の利かぬ氣から出たものと僕

には思へる。神経の緊張で思索の緊張ぢやない。非力なものが向ふ鉢巻で體力以上の長時間力んでゐる體に見える。其證據には言葉遣ひや文句に隙間がないと同時に、主意主張其物は殆んど同じ所を徘徊して毫も讀者を甲から乙迄否應なしに運び去つたといふ大力無雙な點が見えない。いたづらに神経がびり／＼張り詰めてゐるから、讀者もたゞ此暑いのには神経を昂ぶらせられる丈で、其割合に理知の方面に何等の夫程の新しい經驗を得ない。

君の平生口にする緊張とか充實とか云ふのは何だか神経作用ぢやないかと思ふ。もつと鷹揚にもつと落ち付いて、もつと讀手の神経をざらつかせず、穩やかに人を降參させる批評の方が僕は真に力のある批評だと云ひたい。

僕は吉右衛門氏を知らない。夫から君の論に夫程同情がない。だから斯う見えるのかも知れない。然し夫も批評の一角度だから、君は參考にしても損はあるまい。君あれをもう少し張ると腹の皮が割けるよ。夫が内部の實質で大きく膨れ出すんでなくて徒らに腹に空氣をつめて緊張させるからだらう。願くはもつと落ち付き玉へ。あの書き方は文藝欄に一欄位のものを書く短かい時間内に應用すべきものではないか。暑中だからあつさり願ひ度と云つたら君は畏まりましたと云ふに拘はらず君はあんな暑苦しいものを書いた。暑苦しい思をする以上は其代りに何か頂だかなくつちや割に合はない。君は何を興へたといふ積だらう。

中村星湖が君に答たいから書かして呉れといつて来たから承諾した。八月一日に出すから切抜を送つて上げやう。まあつまらんものだ。

其地皆様御無事當方も變りなく御目出度候。暴風雨はすさまじきものに候 以上

七月三十一日

金之助

豊隆様

九九

八月一日 午後三時—四時 牛込區早稲田南町七番地より

福岡縣京都郡犀川村小宮豊隆へ(八八)

拜啓今一日の新聞に出た中村星湖の文章の切抜を御目につけ申候

小生九日頃東京を出て大坂^原に行き和歌山と明石と堺で講演をする事になり候、暑いのに氣の知れぬ事に候それが大阪の新聞のどの位の利益になり候や疑問に候

今日から暑くなり候。秋聲の小説今日から出申候。文章しまつて、新らしい肴の如く候 艸々

八月一日

金之助

豊隆様

一〇〇

八月三日 午後零時—一時 牛込區早稲田南町七番地より

長野縣下伊那郡飯田町鹽澤直市氏へ

拜啓芳墨拜見子規の遺畫わざ／＼御送御厚意奉謝候如仰中には随分拙なるものも有之候へども一寸面白きものも見受申候故人の記念として永く御保存可然と存候

貴命に任せ該畫は御添書持參の人參る迄當方に御預り置可申候先は右迄 艸々

八月三日

夏目金之助

鹽澤直市様

一〇一

八月八日 午後八時—九時 牛込區早稲田南町七番地より
岡山市古京町内田榮造へ〔四〕〔はがき〕

わざ／＼の御手紙恐入候。明石にて講演の日割は十三日に候へども可成御出なき事を希望致候
あまり遠い所から来て聞いてもらうやうな講演は出来さうもなく候右御返事迄 艸々

岡山へは日取の都合あしく参られざりし譯に候

1011

八月十五日 午後五時—八時 和歌の浦より

府下巢鴨町上駒込三百三十四番地野上豊一郎へ〔四〇〕〔繪はがき〕

講演存外長びき今日當所夫よりさかひ大坂兩所打上て歸京謠會も甚だ心元なく候

八月十五日

和歌の浦にて

夏目金之助

1013

九月八日 午後七時—八時 大阪市東區今橋三丁目湯川胃腸病院より

本郷區彌生町二番地寺田寅彦へ〔三五〕〔はがき〕

病院の三階に寐てゐる。窓から大坂城の櫓が見える。色々な西洋館が見える。夫から山が見える。大間原の居をトした所丈ある。毎日粥を食ふ。おかづは豆腐と麩丈で甚だ心細い。今日のひる刺身を四切食つた。早く東京へ歸りたい。國華の畫を繰返し／＼見てゐる。無事御歸京結構

蝙蝠の宵々毎や薄き粥

九月八日

1014

九月十四日 午後四時—五時 牛込區早稲田南町七番地より

京橋區築地二丁目三十九番地松根豊次郎へ〔三二〕〔はがき〕

今朝は御多忙中ありがたく候

灯を消せば涼しき星や窓に入る

蝙蝠の宵々毎や薄き粥
(右病院にて)

一〇五

九月二十日

午後三時—四時 牛込區早稲田南町七番地より
本郷區彌生町二番地寺田寅彦へ(二三) 「はがき」

肛門切開本日頃より少し楽になり候只今は不足の睡眠取り返し中に候時々御來訪を待つ
風折々萩先づ散つて芒哉

一〇六

九月二十五日

午後五時—六時 牛込區早稲田南町七番地より
京橋區築地二丁目三十九番地松根豊次郎へ(三三)

啓上耳痛愈甚敷よし御氣の毒の至り何とか分別なきや 肛門の方は段々よけれど創口未だ肉を
上げずガーゼの詰替頗る痛み候

連句つゞけたけれど庄屋の門にゴム輪の句氣に入らず何とか工夫の道もあるやうにてつい後れ
申候

貴句遊女屋つゞき外郎を賣るとある外郎とは何の事にて何とよむにや一寸教へを仰ぎたく候
仰臥執筆不自由御察し被下度候いづれ出來次第送り可申候

耳の底の腫物を打つや秋の雨
切口に冷やかな風の廁より

艸々

二十五日

漱石

東洋城様

一〇七

九月二十七日

午前九時—十時 牛込區早稲田南町七番地より
小石川區高田老松町四十一番地津田龜次郎へ(三三)

大阪では御見舞をうけかたじけなく候西川君も來て下され是亦篤く御禮申候小生歸京後かの地

にて萌し候痔疾急に劇しく起り切開の結果今に臥牀夫故手紙も差出さず御兄さんへもどうぞよろしく願候

一草亭君の原稿頂戴致候掲載の運つけ可申候

寐たまゝ手紙を書き候故亂筆にて甚だ恐縮凡て御海容を乞ふ 艸々

九月二十七日

漱石

青楓様

108

九月二十九日

午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より
廣島市大手町一丁目井原市次郎氏へ(三)

拜啓秋冷の候愈御清適奉賀候先般大阪表に旅行中第一の御手紙は拜見當時如仰少々病氣にて入院中故其儘に致し置き歸京せる處又々御手紙是には御返事と思ひしも又々痔疾切開の不幸にて仰臥中如何とも致しがたく打過候今二十九日又々三度目の御手紙に對し甚だ申譯なく此返事を認め候。

鮎はたしかに頂戴まことに難有く歸つて見たら本箱の上に飾つてあり候何だと思つたら魚なので失笑致し候

御申越の事承知は致し居れど只今漸く起き直る位故全快後どうか致し可申候

子規の書いたものは多少あれど皆小生に關係あるものばかり是を他人が有つて居ても詰らないだらうと存候が如何にや

是公二三日前大連へ歸申「候」由今度は病氣で會はず向ふも小生の病氣を知らず其儘に立ち分れ申候

只今大阪の講演を豫約出版するとかにて速記の訂正を依頼され病氣を力めて片付けにかゝり居候夫等にて甚だ失禮病氣はもう大分快復御心配被下間敷候 草々頓首

九月二十九日

夏目金之助

井原市次郎様

109

九月二十九日

午後(以下不明) 牛込區早稲田南町七番地より

耳少々はよろしき由大慶に存候小生も漸次快方御放念被下度候連句は少々取いそぎ候用事出来
其儘無申譯候大阪地方にての講演を豫約出版とかにて訂正をたのまれ衰弱の許すがさり手を着け
ぬと飛んだ無責任のものを豫約處に送虞有之それ故庄屋の門もあれざり中絶不惡御海恕願上候今
日冷氣に候ゆかたにて床の上に起き直さ少々寒さを感じ申候
無句 艸々

九月二十九日

東洋城様

漱石

一一〇

十月四日 午後零時—一時 牛込區早稻田南町七番地より
牛込區矢來町六十二番地森田米松へ(五八)

拜啓澁川氏より別紙の通申來候が危険云々の事につきましては念を押し置かれ候や後で紛々が起る
と又迷惑なるが一寸伺ひ候 草々

四日

金之助

草平様

一一一

十月十日 午後二時—三時 牛込區早稻田南町七番地より
大阪市北區中之島朝日新聞社内高原操氏へ(二)

拜啓過般阪地滞留の節は種々御厚誼を辱ふし殊に病氣の折は一方ならぬ御厄介に相成不堪深謝
至候歸京後すぐ御挨拶可申上の處早速餘病にとりつかれついで今日迄愚圖々々に打過無申譯候
阪地引上の折御令聞御病氣の旨如是閑氏より傳聞如何かと案じ煩ひ候へども遂に拜顔の期其儘
にて東歸遺憾千萬に候追て御輕快最早御退院の事と存候へども時節がら随分御攝養可然と存候
右午遅延御禮迄 勿々頓首

十月十日

夏目金之助

高原操様

107

十月十一日

午後四時—五時 牛込區早稲田南町七番地より
大阪市東區南久寶寺町二丁目水落義一氏へ(二)

拜啓高秋の候も漸く近き候處御健康如何に候や入院中は毎々の御見舞恐れ入候ことに再三御藏書を拜借爲めに病床の慰藉不尠歸東後早速御禮可申上筈の處又々餘病繼發つい昨今迄苦し居候ため乍不本意失禮をかさね候何卒御海容被下度
御心配をかけ候痛疾今は殆んど平癒餘病は痔にて此方は少々癒し損ひの氣味も候へどもまづ一應の起臥には無差支に至り候御安心可被下候
右延引の御詫をかね御報旁御禮迄 勿々頓首

十月十一日

露 石 様

金之助

十月十一日

午後五時—六時 牛込區早稲田南町七番地より
大阪市東區道修町一丁目青木新護氏へ(二)〔繪はがき〕

拜啓御地にて入院の節はわざ／＼御親切に御見舞難有御禮申上候歸京後又々痔を苦しみ御挨拶も今日迄遅延先は御詫方々御禮迄 勿々

十月十三日

午後二時—三時 牛込區早稲田南町七番地より
高田市横町森成麟造氏へ(四)

拜啓夫からは大無沙汰を致しました。先達は大患後一週年の時日を御忘れなくわざ／＼電報を賜はり候處實は御恥しいかなあの時は大坂で又々やつつけて入院してゐたのです。
どうも矢張り自分の咎なのでせう、誰を恨む譯もないが、事情を御話しますとね、大阪の社から講演をたのまれて明石和歌山堺大阪の四ヶ所で喋舌つたのです、其堺あたりから少々腹が妙になつてこいつはといふ懸念も起りましたがもう一つだと思つて大阪を片付けて宿屋で寐てゐると

何も食んのに嘔吐を催ふしてとう／＼胃をたゞらして夫から血が出ましたので驚ろいて湯川胃腸病院へ這入つて三週間程加養して夫から東京へ歸つて又々須賀さんにかゝりました。すると何の因果か歸京の翌日から肛門周炎とかいふ下卑た病氣になつてとう／＼切開しました。夫が悪性なので三週間後の今日もまだ細い穴が塞がらない所があつて膿が出るのです。

右の譯であの電報に對しても梨の礫の御無沙汰といふ譯で今日迄打過ぎましたのは甚だ申譯がありません。須賀さんの御蔭で胃は殆んど平癒しました。其方は安心して下さい。

此間病中の感想などを新聞にかいたものを入れた隨筆様のものを出版しました。是は記念のためだから是非一本を差上たいと思つてゐますが、まだ其儘してあります、何れ其内送ります。

近頃は高分高田で流行なさる事だらうと妻とも申し合つてゐます。御令聞へどうかよろしく先は右迄 勿々

十月十三日

金之助

森成様

十月十五日

午前十時—十一時 牛込區早稲田南町七番地より
本郷區駒込淺嘉町坂元三郎へ (一三)

拜啓先達は御見舞難有候俸其後消息も打絶居候川淵正幸氏死去の趣突然承知仕り洵に氣の毒の至に堪えず早速同家宛弔辭は送り置候へども猶明十六日午後一時青山にて神葬の由につきもし御會葬にも候はゞ封入の名刺小生代として葬儀がゝり手元迄御渡し願度尤も明日は月曜にて時間の具合も不便なれば或は御出無之やとも存候其節は一向無差支候間其儘に御打捨置願候右午唐突御依頼迄 勿々

十月十五日

金之助

坂元様

追白 病氣未だ全快せず漸く車にて醫者へ行く位に候但し神樂坂邊迄の歩行は差支なき模様候へば御放念可被下候

十月十八日 午後四時—五時 牛込區早稲田南町七番地より

廣島市大手町一丁目井原市次郎氏へ (三)

拜啓先便にて子規の遺墨御所望の趣承知は致したれど例の病氣にて億劫なりしたためつく／＼遅延無申譯候漸く起臥にも差支なき程に至り候につき短い書翰を戸棚の中より取出し同封にて差上候御受納可被下候 勿々敬具

十月十八日

夏目金之助

井原市次郎様

一一七

十月十八日 午後四時—五時 牛込區早稲田南町七番地より

布哇ホノル、布哇中學校田島金次郎氏へ

拜啓未だ拜顔の榮を得ず候處愈御清勝奉賀候。過般は拙著貴校にて教科書として御使用の趣光榮不過之と存候。其後右拙著に關する繪端書御出版につき惡筆を御求めに相成甚だ慚愧の至とは存じ候へども御望みに任せ候處御役に立ち好都合に存候

今回は圖らずも切地二種わざ／＼御遠方より御送をうけ感佩此事に候。内地にては珍らしき織物のみ何れも美しく眺められ申候。何に致してよきや未だ好分別も浮び不申^原簞笥の裏に一先づ納め置候右乍早速御禮迄申上度 勿々敬具

十月十八日

夏目金之助

田島金次郎様

一一八

十月二十日 午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より

横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ (三三) (はがき)

此間は久々にて三君の御顔を拜し候久々といひ遠方の御來駕といひ甚だ粗末な接待振に恥入候。するめ正に届き候難有候。包が破れて五六枚ひさちぎつてあるには腹が立ち候呉れといふなら呉れるのに、怪しからん奴ですね。どうか参考の爲だから責任者へ事實を教へて注意を促がして下さい。 勿々

十月二十日 午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より

京橋區築地二丁目三十九番地松根豐次郎へ〔三三〕〔はがき〕

戒名ハ

滄溟院殿水月一如(又ハ一夢)大姉

にては御氣に入りかね候や戒名と字の大きさと書體が分ればすぐ管を頼願ひ可申候 勿々

十月二十一日 午後零時—一時 牛込區早稲田南町七番地より

京橋區築地二丁目三十九番地松根豐次郎へ〔三五〕〔はがき〕

浩洋院殿では水月云々に即かず不賛成に候、滄溟の二字悪くば慈海院殿、寂空院殿、觀海院殿、
虛明院殿、淨皓院殿など如何にや。

たのまれて戒名選ぶ鶏頭哉

十月二十二日 午後五時—六時 牛込區早稲田南町七番地より

京橋區築地二丁目三十九番地松根豐次郎へ〔三六〕〔はがき〕

昨日ある本を見たら海の事を靈源といふやうに覺え候
靈源院殿は戒名らしく候如何にや

十月二十三日 午後五時—六時 牛込區早稲田南町七番地より

鹿兒島市春日町百二十六番地皆川正禧へ〔三〇〕

其後は御無沙汰あれから又痔を病んでとうとう切開漸く一週間程〔前〕に起坐然し少々瘡損つ
て未だに醫者に通つてゐる

此間の本の事は出さうかといふ望みのある男どこかへ旅行して歸り來らず此間甲州より晝端書
が來たから多分そこに居るのだらう

右の爲め返事も出さず甚だ失禮まあ出せる處でもあつたら手紙を上げるから夫迄待つてくれ玉

へ
此頃は好い天氣だ。鹿兒島が見たい。野間によろしく。野村は岡山へ行つた。忙いから是で失敬

十月二十三日

金之助

正 禧 様

一一三

十月二十三日

午後五時—六時 牛込區早稻田南町七番地より

相模國鎌倉由井ヶ濱菅虎雄氏へ (二四)

拜啓乍唐突御願がある戒名を一つ書いて貰ひたい、縁喜が悪いけれども是非願ひたい
是は僕の教へた法學士今式部官松根といふ男の父母のである。書體は正楷字くばり封入の割の
通り右は父左は母と御承知ありたし(母のは靈源院殿)
松根といふ男は引越の時君が僕の門札を書く所を見てゐたから君に頼みたいといふのである
石屋が催促するので可成早い方希望、用紙は厚い方石屋には都合よき由右迄 勿々

十月二十三日

金之助

虎 雄 様

一一四

十月二十三日

午後六時—七時 牛込區早稻田南町七番地より

京橋區築地二丁目三十九番地松根豐次郎へ (二七) 「はがき」

實は先刻菅に手紙を書いて頼んでしまつたり。毎日手紙の返事をためて置くとは大變故今度はす
ぐ片付けた積で大得意の處模様替には一寸困り候今更よすと云ふのも異なるものではないか
小生書いて見たい様を己惚もあり、靈源も通知後故あの儘にて可ならん、但しもつと面白いの
が出来たら改正してもよし

一一五

十月二十五日

午後三時—四時 牛込區早稻田南町七番地より

原稿を歸^原して呉れといふ端書は拜見したが、二十四日には社へ出る必要があるので夫迄でいゝと思つて返事を上げなかつた。

所で今度ある意味から森田にやめて貰はなければならぬ事になつた。森田が居なくなれば文藝欄の編輯者の問題が出る譯だが、僕は少し思ふ處があつて文藝欄を廢止する相談を輯^原部の人として仕舞つた。今迄は色々御世話になり又是迄骨を折つたものを放棄するのは惜しいものであるが、社全體の紙面の改良や原稿の選擇に就いて僕が何か無遠慮の事を云はうとすると、どうしても僕が先づ是丈の犠牲を拂つて置かなければならない。文藝欄を維持する積なら維持はいくらでも出来る、又改良も出来る。然しさうすると他人の領分へは口を出し悪くなる。僕は今度池邊君が退社したに就て或は自分も出やうかと考へたが残る人々から事狀を聞いて見るとさう意地を通す必要もないから居る事にした。のみならず自分の直轄してゐる文藝欄の棒を永久流して仕舞つた。是は僕が猶將來に朝日をより好くし得る見込を抱いた爲であつて、決して自分の地位を安固にするため他人の云ふ通りになつたのではない。夫は君にどう思はれても構はないが、向後到底僕の發見し得る「朝日」の點々に於て改善の身^原込が立たないとなつたら、多分僕はやめるだらうと思ふ。

夫からもう一つは文藝欄は君等の氣焰の吐き場所になつてゐたが、君等もあんなものを斷片的

に書いて大いに得意になつて、朝日新聞は自分の御蔭で出来てゐる杯と思ひ上げる様な事が出来たら夫こそ若い人を毒する悪い欄である。君杯にそんな了見はあるまいが、近來君の行爲やら述作に徴して見ると僕は何だか心細くなる様な點もある。あれで好いつもりで發展したらどうなるだらうと云ふ氣が始終つけまつてゐる。要するに朝日文藝欄杯があつて、其連中が寄り合つて互に警醒する事はせずに互に挑撥し會^原ふのも少しは毒になつてゐるだらうと考へる。それで文藝欄なんて少しでも君等に文藝上の得意場らしい所をぶつつぶしてしまつた方が或は一時的君や森田の藥になるかも知れない。

僕は向後文藝上の事に關して君等の援助を仰がなければならぬ場合が澤山あるだらうと思ふ。現に援助を仰ぎつゝあるのに、こんな事を云ふのは甚だ失禮でもあり諸君も氣を悪くするかも知れないが實際昨今の僕はさう感ずるより外に仕方がないのだから、漱^原石は本當にしか感じてゐるのだと思つてくれ給へ。さうし「て」笑ふとも怒るともして呉れ玉へ。

玉稿は同封で歸す。あの端書の書き方杯を兎角申すのは何だか小八釜しい様だが「闇から闇へ」杯いふ文學的形容詞は用ひない方が穩當であらう。殊に「夫は堪へられない」に至つては讀む方では一種厭な感じがする。自分の書いたものが自分の豫期した時間内に新聞に出ないのは不愉快には違ない。又其原稿がどうなつたか分らないのも不平には違あるまい。けれども夫に堪へられないといふのは自分の書いたものが左も〜重大な論文で、夫を掲載しない新聞が左も〜不徳

義で、之を草した自分は左もく、大家である様に讀まれる。以上の諸條項を備へないで猶且つ下らない事に堪へるとか堪へられないとかいふのは一種のセンチメ「ン」タリストか或は片寄つた文壇の流行語を故意に使用するコンエンシヨナリストである。

僕の近來の君に注意したい點は道德的にも藝術的にも此手紙のうちに含まれてゐると思ふから、とくにそれを長く説明したのである。

原稿は五回分丈社に回つてゐた。僕は自分から請求して、悉くそれを持ち歸つた。理窟から云へば掲載の有無に拘はらず原稿料を拂はなければならぬ。が僕は君等が單に原稿料をとる爲にのみ書いてゐると思はれるのが厭だから、わざ「と」請求しないのである。以上

十月二十五日

夏目金之助

・小宮豊隆様

津田君には廻送してやる方を御勧め致し候

十一月一日

午後三時—四時 牛込區早稲田南町七番地より
京橋區築地二丁目三十九番地松根豊次郎へ (二八)

拜啓先夜は失禮昨日菅氏参り戒名數通の楷書見せ候處何れも棄てがたき故みんな御目にかけて候小生のよしと思ふのに朱圓を附し置申候

封入の切符頼まれものに候どうか買つて下さい

今日辭表を出し候社長出てくる迄何とも方づかざるべし

右迄 匆匆

十一月一日

金之助

豊次郎様

十一月十五日

午後二時—三時 牛込區早稲田南町七番地より
府下青山原宿二百〇九番地森次太郎氏へ (二〇)

拜啓先達御依頼の川端先生の畫の贊美事にやり損ひ申候、仕方なしに上部を切り取り短かい所

へ蝶去つて又蹲踞る小 哉と書いてわざと猫の畫を中間に挟み猫と云ふ字を省き申候是ぢや多分
駄目かとも存じ不申候へども此次御出の節入御覽可申候

子規の對幅には釣鐘のうなるばかりに野分哉といふ句を認め候是亦出來榮あまりよろしからず
不可なければ何枚で「も」書き直す積に候先は右御報迄 勿々頓首

十一月十五日

金之助

森 圓月様

一三八

十一月二十二日 午前十時—十一時 牛込區早稲田南町七番地より

岡山市二番町五番地野村傳四へ (五九)

俳句はみな駄目川柳は蒲團の句位がいゝだらう

拜復大阪で病氣をしてゐる頃君が岡山へ行つた話を聞いた、其後東京へ歸つてから何か學校に
騒動がある由も聞いて實は心配してゐたが是は君が行く前からの騒動だから君は其善後策の一部
分として招聘されたのだらうと思つて先づ安心してゐた

君の手紙を見ると萬事がよく分つたまあ當分我慢してゐたまへ苦しいたつて東京の佐内坂にゐ
た時より増しだらうあの家を見た時は少々氣の毒になつた。大阪朝日の方へ原稿を廻した事も知
らなかつたが出る事は一遍出たのかね夫でも出ればまだ好いのだ。東京の社でも少々ごたゝが
あつて僕もとうゝ出やうとしたがみんながとめて呉れるのでまあ思ひとまつた、僕見たやうに
横着をしてゐて夫で不平がましく出るの引くのといふのは實際義理知らずのやうでもある。

痔が癒り損なつて未だ尻に細い穴が出來てゐる、是が結核性で追つて腸結核にでもなつちあ夫
限りだと心細い事を考へたりしてゐる。實際そんな例もあるのだからな

森田は已めて貰つた、森田と僕の腐れ縁を切るには好い時機なのである。當人は無論筆で立つ
氣だらう

此半きれば字を書いてやつて禮にもらつたものだが生涯こんな結構なものを使ふ事は二度とふ
たゝびあるまいと思つてゐる何でも越前か何かの名産ださうだ

漸々寒くなるので日の遠い書齋がいやになる日當りのいゝ家をたてゝごろゝしてゐたい、
右迄 勿々

十一月二十二日

金之助

傳 四 様

奥さんへよろしく

一二九

十二月一日 午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より

京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内杉村廣太郎氏へ(八)

拜啓末女死去につき懇篤な「る」御弔詞に接し千萬難有拜誦實は幼兒の事故入らぬ人騒せも憚と思ひわざと何處へも通知を發せざりし次第故あしからず

葬式も喪車に生等夫婦と亡兒の姉妹兄弟位がついて行く丈の極めて簡單なものにしてしまいました是も御含み迄に申上て置きます

君はじめ他の社内諸君が多忙の時間を割くべく心配せられては却つて恐縮だから其邊はよろしく願います

死んだ子は夕飯を食ひつゝ突然ツツ伏した儘死んだのださうです大人なら腦溢血だが小供では何だか分かりません〇〇君も不思議だ〜と繰返してゐました

萬事は御目にかゝつた折の事まづ不取敢御禮迄 勿々

十二月一日

金之助

杉村 老兄

荆妻よりも宜敷御禮を申上ます

一三〇

十二月十九日 午後八時—九時 牛込區早稲田南町七番地より

本郷區臺町二十七番地鳳明館東新へ(三)

御手紙拜見致候ロダンの談話は通俗的のものに有之候や又は面倒なものにや餘堅^堅過ぎて新聞むきならず雑誌向ならば其方へ廻したら如何かと存候

右伺ひたる上にて紹介して見るべく候一寸御返事願度候 草々

十二月十九日

金之助

東 様

一二五

十二月二十八日 午後(以下不明) 牛込區早稻田南町七番地より

大阪市北區中之島朝日新聞社内長谷川萬次郎氏へ

拜啓年も押しつまり候如何御暮しにや永らく御病氣のよしちつとも不知失禮致候もう御全快の由結構に存候小生は痔の方まだ治らず隔日に醫者の厄介になり居候

愈小説をかく事と相成候へども健康を氣遣ひ日に一回位の割にて龜の子の如く進行する積に候此間中は東京の方にごたく有之小生も一事は罷めやうかと思ひ候へども色々他の勸告もあり又御厄介になる事と致候丈夫になつて又大坂へ参り講演でも致して氣骸をあげ度候
右御返事迄 艸々

臘月二十八日

金之助

如是閑様

明治四十五年 大正元年

一

一月一日 午前零時—五時 牛込區早稻田南町七番地より

横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ (二四)

〔印刷したる年賀狀の端に〕

去年は三君にて御光來失禮二君によろしく

二

一月一日 (以下不明) 牛込區早稻田南町七番地より

本郷區湯島順天堂病院第十三號室中勸助氏へ (三) 〔はがき〕

〔印刷したる年賀狀の端に〕

御病氣の由御大事に可被成候

二二八

三

一月十三日 午後零時―一時 牛込區早稲田南町七番地より

長野縣諏訪郡豊平村二十九番地永田登茂治氏へ〔三〕〔はがき〕

拜復子規の書翰只今多忙にて探しがたく候其内閑を得候はゞ見つけ可申候差支なきもの出で候へば差上可申候

四

一月十三日 午後三時―四時 牛込區早稲田南町七番地より

廣島市大手町一丁目井原市次郎氏へ〔四〕〔はがき〕

拜啓御贈のカキは三十一日の夜半を過ぎ一日の午前三時半到着門口をドン／＼叩き候。御蔭で元日の客に振舞申候難有御禮申上候拙著「切抜帖より」一部御目にかけて候

五

一月十三日 (以下不明) 牛込區早稲田南町七番地より

牛込區市ヶ谷甲良町二十番地金子雄太郎氏へ〔三〕〔はがき〕

拜復まづい字を御所望の由承知致候其うち都合よき時書き可申候句は作り不申候みな古いものに候何か御望みも有之候や伺ひ上候

六

一月二十四日 午後一時―二時 牛込區早稲田南町七番地より

小石川區指ヶ谷町百三十三番地内田榮造へ〔五〕〔はがき〕

拜啓水蜜の罐詰小包にて御送難有拜受病兒とともにあまさ汁を吸ふ積に候不取敢御禮迄 艸々

七

一月二十八日 牛込區早稲田南町七番地より

二二九

拜啓先便にて獨乙御出立の由は承知致せしが何時頃御着か分らず其儘に打過候處今朝御端書にて愈御歸朝の趣に接し先以て海陸御無事御歸國大慶の至に存候

實は今朝神田へ参り候故さうと知つたらば一寸御尋ね致せばよかつたと存候。此頃小説を書き居り今日も是非一回書かないと大阪のゲラが後れるといふ始末故拜趨を怠たり候明後日は又午前中に神田へ行かねばならぬ故其節は一寸顔を出し可申候尤も諸方御出向の必要も有之べく無理に御待受は恐入候。病餘自分の健康を氣づかひわざと毎日一回分の小説外原か書かざる爲め其日其日に追はれ落付きかね候不取敢御歸朝の御喜び迄餘は拜眉萬縷 草々敬具

一月二十八日

素川 老兄

金之助

八

二月九日

午後八時—九時 半込區早稲田南町七番地より

本郷區駒込西片町十番地笹川種郎氏へ(二)

御手紙難有拜見致候御叮嚀なる御招待辱なく候ことに横山畫伯も御來會と承はり候へば是非都合つけ参り度と存候へども打明けた御恥づかしき處を申すと目下御承知の小説に追はれ一日後れると社の方で一日休まねばならぬ始末にて大弱りの處に候 過日時々休んで呉れと申し叱られ候木曜の面會日などは殆んど書き損はぬ許り危うき思を屢繰り返し居候尤も旨い具合に行けば一夕の餘裕位はとれ可申れど十二日は朝のうち参る人ありひるから四時位の間には小生の瘦腕にては一回書き上げる事覺束なく候へば或は失禮致す事に相成るべきかと存候右の譯故もし小生の爲ならば會合の日を他日に御延ばし彼岸過に至れば幸甚もし又他の諸賢との御會合ならば小生は繰合せつけば参上もし書けなかつたら失敬する位の處にて御勘辨願度候

甚だ我意にて定めて御迷惑とは存じ候へども右の次第故どうぞあしからず御海容被下度候不參の節は大觀君に大兄より宜しく敬意を致され度 先は右不取敢御返事迄 艸々敬具

二月九日

金之助

臨風賢契

座下

二月十二日 午後一時—二時 牛込區早稲田南町七番地より

大阪市東區上本町五丁目妙中寺内武定診七氏へ (三) 「はがき」

拜復毎日小説を書いてゐるので氣が落ち付かなくつて何も外の事が出来ません甚だ苦痛です。御手紙の「凍」といふのは一月號ですか一月號ならことによると無くなつたかも知れませんが二月號に出て是から送つて呉れる内にあるなら是非拜見します

二月十三日 午後五時—六時 牛込區早稲田南町七番地より

本郷區駒込西片町十番地笹川種郎氏へ (三)

拜啓伊豫文^原よりの御狀拜見あゝ美人迄御揃にて敬意を表されては大に恐縮致候

あの日半分書さかけたる處に寶生新といふ謠の先生見え稽古をしてもらふと四時で入湯喫飯を除きとう／＼八時半になり漸く社へ送り候始末夫が爲め御兩君にも失禮美人にも失禮無申譯候小説をやめて高等遊民として存在する工夫色々勘考中に候へども名案もなく苦しがり居候

大觀君によろしく御傳願候雲峯君の雅名承知の如くにて思ひ出せず候同君にもよろしく願候餘は彼岸過拜眉の節萬々 頓首

二月十三日

金之助

臨風老臺

机下

二月二十三日 (以下不明) 牛込區早稲田南町七番地より

大阪市東區上本町五丁目妙中寺内武定診七氏へ (三) 「はがき」

拜啓「凍」を讀みました是から毎號つゞけて拜見致します。飽きずに仕舞迄御書きなさいませ
二月二十四日^原

事實の書き方はあれで結構だと思ひます

一一二

二月二十八日 午前十二時—十二時 牛込區早稻田町七番地より

赤坂區青山南町四丁目二十二番地鈴木三重吉へ〔五七〕〔はがき〕

拜啓文學士の竹山成美といふ人が今迄本郷順天堂わきの中學（開成？）へ出てゐた處今度端書で秋田の學校へ行く事になつたといつて寄こした。さうすると後任はどうなつたか恐らくはもう極つたかも知れないが一寸聞き合せて奔走して見るのも好いかも知れない。右御報知迄 艸々

二月二十八日

一一三

三月十一日 牛込區早稻田町七番地より

三須柳氏へ

拜啓 御手紙拜見致候愚兄より貴所の御名前を承はり候は餘程久しき以前の様に記憶致候其當時は何時御來訪にやと心待に待居候處遂に御光來なく自然尊名も忘れ居候處突然の御來信事情よく相分り候小生御覽の通りの惡筆に候へども若し御望に候へば何なりと認め可申候但只今小説執

一一四

筆中にて諸方の用事も其儘に打棄置候始末故今しばらく御猶豫願度候小生面會日は木曜日につき同日もし御來訪被下候へば御目にかゝれ得候事と存候是も小説の濟んだあとの方都合よろしく候又平日にてももし必要の節は時間を拵へ御目に懸りても差支なく候故さういふ時は無御遠慮御一報被下度先は右御返事迄 艸々頓首 〔うつし〕

三月十一日

夏目金之助

三須 柳 様

一一四

三月十二日 午後三時—四時 牛込區早稻田町七番地より

大阪市東區上本町五丁目妙中寺内武定銚七氏へ〔四〕〔はがき〕

拜啓「凍」の(二)を拜見致しました。前回より面白い様です。私の小説より面白さうです。此次の分も拜見致します。 草々

三月十二日

一一五

三月十三日

午後三時—四時 牛込區早稻田南町七番地より
府下葉鳴町上駒込三百三十四番地野上八重へ(四)

御手紙拜見致しました野上君の御病氣は驚ろきました。あなたも嘸御心配でせう。此間の端書に熱が出て腸が悪いと書いてあつた様ですが大した事もあるまいと思つて返事も出さずに置きました。昨日御手紙と同日に寶生氏に逢ひまして大學へ入院されたといふ話を聞いて夫は困つたと思つてゐた處であります。菅能さんの診斷ではさう軽い方ではないとか寶生氏が申しましたが御手紙の模様では大した事にもならず済みさうでまことに結構です、夫に入院さへしてゐれば手當は充分出来るから貴方は安心して寐て入らつしやい。もし何か手が足りないとか何とかいふ場合に私の出来る事なら仕て上げますから遠慮なくさう云つて御寄こしなさい。見舞にも行く積であります。熱の高い時面會杯して高くなると不可ないから一寸控へます但し當人が誰も來なくつて心細い様だと困るからそんな時には是非知らせて下さい御令弟は見舞に行けるだらうから様子が分るでせうあなたは身體のしつかりする迄傍へ寄らない方がいゝチフスだから感染すると不可ない謠本は慥かに届きました御忙しい處を恐れ入ります 先は御返事迄 艸々

三月十三日

金之助

八重子様

三月十四日

牛込區早稻田南町七番地より
横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ(三五)

其後は御無沙汰に打過候條今般友人津田青楓君上野に自畫の展覽會相開原かられ候につき該件につきもし御手すきならば一寸御目に懸り度由に付御面會被下候へば幸甚に候 敬具

三月十四日

夏目金之助

渡邊和太郎様

三月十四日

午後三時—四時 牛込區早稻田南町七番地より

小石川區高田老松町四十一番地津田龜次郎へ(三)

一三八

先刻は失禮御約束の紹介別封相認め候間御受取被下度候先は當用のみ 勿々頓首

三月十四日

夏目金之助

津田 青楓 様

一八

三月十七日 午後六時—七時 牛込區早稲田南町七番地より

福岡市福岡醫科大學久保猪之吉氏へ(二)

拜啓時下餘寒猶烈敷候處愈御清適奉賀候却説小生知人に長塚節と申す歌人有之故子規と根岸短歌會杯にて研究致し其後は小説杯に興味を持ち現に一昨年は東京朝日紙上に「土」と申す長篇小説を載せ候男に候此人不幸にして喉頭結核を患ひ岡田博士の治療を受け先頃退院致し候處今度思ひ立ち明日より九州地方漫遊の途に上り候に就いては自然御地へも參るべくにつき是非共貴所の診察を受け度希望の由にて小生に紹介を依頼致し候小生も知人の事とて甚だ氣の毒に存じ未だ御懇談も致したる事なき學兄に對し失禮とは存じ候へども思ひ切つて引受此書面を認むる事と致し

候何卒事情御諒察の上右長塚節氏御地へ參り候節は一應御診察の上相當の御注意御與被下候へば難有候先は右御願迄 勿々敬具

三月十七日

夏目金之助

久保猪之吉様

一九

三月十七日 午後六時—七時 牛込區早稲田南町七番地より

小石川區高田老松町四十一番地津田龜次郎へ(四)

拜啓今日展覽會を拜見に參りました。あのうちの非賣品のセーブルといふのを譲つて頂けませうまいか尤もあまり高くては困りますが。夫が不可なければ京都岡崎町といふのと宗〇橋とかいふ十八圓のを二枚頂きたいと思ひます。

事務へ何とも申して參りませんから、貴方からよろしく願ひます。もし右の外に貴方の推賞なさるのがあるなら御相談の上以上のをやめて其方に致してもよろしう御座います。

青木君の繪を久し振に見ましたあの人は天才と思ひます。あの室の中に立つて自から故人を惜

一三九

いと思ふ氣が致しました。以上

三月十七日

津田青楓様

夏目金之助

二〇

三月十八日

午前十時—十一時 牛込區早稲田南町七番地より

小石川區高田老松町四十一番地津田龜次郎へ(五)

昨日あの手紙を出したあとで同日に展覽會を見た寺田君から別紙の様に云つて來ました。昌の向に人家のあるといふのは私は一寸思ひ出せないが貴方はどう思ひますもし其方がよければそれにしてもよろしう御座います 以上

三月十八日

津田青楓君

夏目金之助

二一

三月二十日

午後三時—四時 牛込區早稲田南町七番地より

府下北品川三百九十九番地中村翁へ(二三)

拜啓彼岸過迄のあとに大兄の小説を載せる事に相談出來候大兄は其後書き直しつゝありや地方へくばる引札廣告の豫告は成る可く早さがよき由作の名前と右豫告(是は法螺丈で澤山のよし)を澁川君に廻して呉れ玉へ

載る前に一寸書き振其他につき拜見心付きたる處御注意致してもよろしく候先は右迄 匆々頓首

三月二十日

夏目金之助

中村翁様

二二

三月二十一日

午前十時—十一時 牛込區早稲田南町七番地より

拜復二月より盲腸炎にて御臥床の由承はり驚き入候ちつとも知らず見舞も申不上失禮御海恕白川も先日來腸窒扶斯にて大學に入院貧乏人の病氣程困るも「の」無之候然し順潮に御快方結構此上なく候

小説の義は小生の分今少々づき可申夫に大兄の六十回を加へれば御快癒迄に充分間に合ひ可申あとは其時々々に御執筆にて無差支事と存候間に短篇をはさむ事も人撰に一寸困るべく又君の前に名前の左程あがらぬ人を載せて新顔が二人つゞくのも妙ならず時間さへあれば小生も玉稿を拜見し書き直しも請求致すやも計られねど今は小生も多忙ことに大兄も病中なればいつそ其儘にて出し可申御異存なくば澁川君に承諾の旨御報被下度候

段々春暖の候好い心持に候毎日小説を一回づゝ書いてゐると夫が唯一の義務の様な氣がして何にも外の事をせず早く切り上げて遊んだり讀書をしたりするのが楽しみに候

「雨の降る日」につき小生一人感懐深き事あり、あれは三月二日（ひな子の誕生日）に筆を起し同七日（同女の百ヶ日）に脱稿、小生は亡女の爲好い供養をしたと喜び居候
先は右迄 艸々

三月二十一日

金之助

翁様

引札廣告の件御忘なき様願上候

二三

四月二日

午後零時―一時 牛込區早稻田南町七番地より

大阪市東區上本町五丁目妙中寺内武定銚七氏へ (五) 「はがき」

つは露一部御惠贈難有拜受致候櫻雲駉蕩の時節筆硯愈御清勝奉賀候

御禮迄 草々

二四

四月三日

午後（以下不明） 牛込區早稻田南町七番地より

府下北品川御殿山七百十八番地中村翁へ (二四)

拜復僕の方へも澁川君より來書にて君の手紙と同様の事を申し來り候

白鳥氏のは販賣よりの依頼もある由申添有之大兄は氣拔の姿にて御残念ならんも身體の爲には其方却つて御便宜なるべきかと存候
存分御攝養祈望致候 艸々

四月三日

翁 様

金之助

二五

四月六日

午後零時—一時 牛込區早稲田南町七番地より
本郷區大學病院三浦内科傳染病室野上豊一郎へ (四九)

其後は病勢も次第に減退食事も少々は參るやうに御回復先以て結構に存候 あれからもう一遍見舞に行かう／＼と思ひながらつい時間と序なく夫限になつて甚だ不相濟 今は上野も向島も花の眞盛新聞では毎日消息を聞かぬ事なし、小説まだ濟まぬ故何處へも不參尤も隔日に神田の醫者へ赴く途上江戸川の分は電車より賞翫、昨日は久振で虚子の訪問を受けしばらく話し候 病牀嘸御退屈の事と御察し申候まだ讀書杯の騒ぎにてもあるまじく精々ひまにあかせて空想に御耽り可

然か 何れ其内參院萬々可申述候 以上

四月六日

金之助

豊一郎様

二六

四月六日

午後零時—一時 牛込區早稲田南町七番地より
岡山市二番町五番地野村傳四へ (六〇)

拜啓花の頃愈御清適奉賀候上野も墨堤も人の出盛のよし新聞で見ればかり、久しく花には御無沙汰岡山の櫻は如何にや 四月の様に遊ぶ事の多い月に小説を書くのは甚だ無風流の至り來年からは注意してやめに致したい。

小供が死んだんで美しい香爐わざ／＼御送り御芳志無此上喜び居候新らしい家にて佛壇といふものなく机の上に線香を焚いてゐる丈なれど香爐は持合せを使つてゐる故あの高麗焼は僕の机の上に置き候。あれはコマヤキぢやないよ。砥部焼といつて伊豫の松山で出来るものだ。願くは四圓五十錢の端溪にしたかつた尤も四圓五十錢の端溪も願る怪しいものだが端溪にあらずとて輕蔑

するには當らない大事になさい

只今一家無事長女小學校を卒業高等女學校に入る、アイ子幼稚園より小學に移る。主人の白髪段々濃くなる細君は益肥る、まあ其位なもの也 君の方にも御變りなく結構
右不取敢御禮迄 艸々

四月六日

金之助

傳 四 様

二七

四月十四日

午後八時—九時 牛込區早稻田南町七番地より

清國湖北省沙市日本領事館橋口貢氏へ (二五)

拜啓御地此間よりの騷亂にて定めし物騒の事とひそかに心配致居候處別段の事もなくまづ結構に存候

御通知の隋代の香爐の銘 横卷のもの着古雅と可申か甚だ面白きものに候机上にそなへ日々珍重可致候 夫から北周小碑拓本は參らず或は御忘になりたる事かと存候

端溪の硯安きもの有之ば求めても宜敷御意に叶ひ候ものもあらば御買置序を以て御送願候代は此方より爲替にて可差出候

五葉君に久しく面會せず半次郎君は英國行のよし、傳四岡山にて不平を竝べ居候 久留幸吉が美くしい奥さんをもらひ三四日前同伴來訪

東臺の花散り春風砂を卷き居候

四月十六日

夏目金之助

橋口 貢 様

二八

四月十五日

午後三時—四時 牛込區早稻田南町七番地より

京橋區築地二丁目三十九番地松根豊次郎へ (二九)

端書毎度ありがたく拜見 彼岸過迄はもう一週間に完結のつもりなれどつもりがあやしき故少々の遅速は可有之か

遊びに御光來なら御待ち申上候 一つどこかへ御供致してもよろしく候

ひまになつたら悪筆をふるひ此間のぬめを汚し可申色々の人から頼まれて居候處いづれも延ばしてある故一時に眞黒に致し候此間ある人來りやけになると純潔な處女を悉く墮落させて愉快を呼びたいと申候小生の絹や紬を汚すのも同様の結果だと思ふと聊か遠慮致し度考も起り候
右御返事迄 草々頓首

四月十五日

東洋城様

金之助

二九

四月十六日

午後三時—四時 牛込區早稻田南町七番地より

本郷區彌生町二番地寺田寅彦へ (二七七) (はがき)

今度學士院で表彰されるもの、數昨年三倍四倍になりたり、小生の思ひ通りになりて學海のため甚だうれし。其内寺田寅彦の名が出てくる事を希望致し候

三〇

四月二十一日

午後三時—四時 牛込區早稻田南町七番地より

福岡市外東公園久保頼江氏へ (二)

拜啓過日久々にて御出被下候節は失禮のみ御海恕可被下候其みぎり御約束の猫の中巻本屋より
取寄せ小包にて御送り申候御受取願上候

花も散りました十九日に潮干狩に行つて風と雨で散ざんな目に逢ひました。

此間いたゞいた博多織はとうとう半井さんにやりました。

福岡はもうそろそろあつくなるでせう。儉約をして御金を御ためなさい。時々拜借に出ます。

右迄 艸々

四月二十一日

夏目金之助

久保頼江様

御良人様へよろしく此度御出京の節は是非御目にかゝり度と存候

三一

四月二十三日

午後二時—三時 牛込區早稻田南町七番地より

清國湖北省沙市日本領事館橋口貢氏へ (二六)

拜啓過日御寄贈にあづかりたる隋代の鼎の銘の御禮に木版の畫端「書」を四五十枚^原入御覽ます
是は廣重のと國華などに出た古代の名畫の縮版に候

不案内にて清國で税をとられるかどうか知らずもし取られたら御免可被下候
花も散り申候此間中は潮干の時節に候もう暑くなり申候
先は右迄 艸々

四月二十二日

橋口 貢様

夏目金之助

三二

四月二十五日

午後六時—七時 牛込區早稻田南町七番地より

青森縣北津輕郡板柳村安田秀次郎氏へ (四)

拜啓林檎一箱御寄贈被下難有存候早速取り出し知人にもわかち申候
五葉氏の繪の事本人へ照會致すべく承知の上はあなたより御依頼可然と存候
右御禮旁御報迄 草々

四月二十五日

夏目金之助

安田秀次郎様

三三

四月二十五日

午後六時—七時 牛込區早稻田南町七番地より

牛込區市ヶ谷左内坂町橋口清氏へ (二九)

拜啓其後は御無音奉謝候此間御令兄より隋代の鼎銘とか申すもの送り越され甚だ雅なものにて
愛玩まかりあり候

御近作も有之候や本日漸く小説を書き上げ候につきひまになり候故其内伺ひ可申候
却説青森に居る男にて小生と一面の識あるものより別紙參り候もし御承諾も有之候はゞ仕合せ

の至早速本人へ申つかはし可申候 否や一寸御報願度と存候 艸々

四月二十五日

夏目金之助

五 葉 様

三四

四月二十七日 午後六時—七時 牛込區早稻田南町七番地より

府下菓鴨町上駒込三百三十四番地野上豊一郎へ(五〇)

御退院御目出度存候随分長々の拘留無かし御退屈の事と存候猶病後の御健康萬事御氣をつけ御
かまひ可然と存候

御入院中は生憎小説に追はれしげく御見舞も出来かね残念に候 此二三週間は又胃に酸が出
て運動すると形勢不穩故成るべく静養の工夫致し候 夫に神経もよろしからず閉口致し候。けれ
ども根が呑氣な生分故まあどうかなるだらうと存居候。然し大兄の方は漫性的のものでなき故成
るべく一時に癒して置く事必用に候出來る丈轉地でも何でもしてゆつくり損失を取返す御工面可
然と存候老生如きは損をすれば損のし損まことに心細く候

いづれ其内拜眉萬々 八重子様へよろしく

此間御話の通安倍と中が二人づれにて參り候 安倍は藤村氏の妹をもらふよし何かたしかな糊
口の口はないか杯申居候こしらへて遣りたくも無能力にて如何とも致しがたく候

先は右迄 艸々

四月二十七日

金之助

豊一郎様

三五

四月二十八日 (以下不明) 牛込區早稻田南町七番地より

青森縣北津輕郡板柳村安田秀次郎氏へ(五) (はがき)

橋口氏へ話候處御申越の條件にて五月十二^原過ならかいて上げる由につき改めて大兄より御依頼
ありたく候 草々

四月二十八日

四月末? 牛込區早稲田南町七番地より

高濱清氏へ(一〇一)

拜啓久しく書物を讀まずに居りました處二三日前あなたから頂戴した「朝鮮」を讀む氣になりまして只今讀み切りました。私も朝鮮へ参りましたがとてもあゝは書けません。御京さんといふのが天真樓の何とかいふ女中のやうな氣がします。豊隆は平壤の方をくさしたやうに記憶してゐますが怪からん没分曉漢です。矢張り結構です。

仕舞ひの舟遊びは樂屋總出で賑かな事です。私は前後を通じてあなた(?)が御筆といふ女と假の夫婦になつて歸る處夫からその御筆の手紙とが一番好きです。なか／＼うまいです。一寸敬意を表します。「うっし」

五月二日 午後十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より

本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ(九〇)「はがき」

拜啓厨川氏の著書評する事もなき由承知致候。然し折角讀んでやつたものだから、讀んでやつたしるし迄に十行でも二十行でも思つた通りの事を書いてやつてはいかん。

君の新小説の劇評家といふものを一寸拜見したが益堅くるしくて讀者を苦しめるから、もう少しなだらかにしたら何うだらう

五月二日 午後十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より

大阪市東區廣小路町十七番地高原操氏へ(三)

拜復其後は此方よりも御無沙汰不相變御健勝にて結構に存候却說高著序文の儀拜承實は今もある人の小説に序を頼まれて通讀中に候大兄のは何日頃迄に御入用なるや碌なものは書けねど何か差上てもよろしく候其代りゲラ刷なり校正刷なりを一寸御見せ被下度候

右至急御返事迄 艸々

五月一日

夏目金之助

高原 操様

一五六

三九

五月十三日

午後五時―六時 牛込區早稲田南町七番地より
大阪市北區中之島朝日新聞社内高原操氏へ(三)

拜啓貴著の序文早く書き上げ御送付致し度心得居候處色々差支起りつい遅く相成無申譯候別封粗末の出来ながら入御覽候もし御氣に入らずは御使用なくとも構ひ不申候後段少々悪口めいた所有之御氣の毒なれど成るべく障らぬ様認め置候御参考にも相成候はゞ幸甚に候先は當用迄 勿々頓首

五月十三日

夏目金之助

高原 操様

極東の日本小包にて差出候肥後十年は仰により今しばらく手元に留め置候

四〇

五月十九日

午後零時―一時 牛込區早稲田南町七番地より
牛込區市ヶ谷左内坂町橋口清氏へ(二〇)

拜啓先日は御光來の處生憎謠の先生參り不得閑談不本意に存候却說牛込御門内雅樂所の黒塀を通り過ぎ二三軒行くと同じ側の角の長谷川といふ古道具屋に二幅對の山水あり遠くから見ると古名畫の様にて頗る尊とく見え候主人不在にて妻君にたづね候處二十五圓の由にて筆者は周文と申居候二十五圓の周文は少々滑稽に候へども念の爲故よく近づきて見候處人の顔や波の紋に非常に繊細なシンカキをもつて書きたる如きコキ線あり。周圍と調合せぬ様なる上松の木の幹の内部のウロコのかき方など甚だ妙チキリンに感ぜられ申候然る處小生斯様な大家の筆墨を多く見ざる故巧拙さへ判じがたく偽物にもせよ一錢五厘のものか二十五圓のものかまどひ候。

繪畫に對する直覺も薰育もなき右様の始末甚だ恥かしく存候へども慾の上からもし畫家より見て相當のものなら奮發して買つて見やうかと存候。大兄もし御散歩の序もあらば一つ御鑑定被下間敷やよければすぐ參り可申、又御手元にて御買置後より小生辨償致せば猶更便宜と存候小生の見る所では牙軸表裝丈にても相當の價格のものと思はれ候。畫は遠方より見れば慥かに

一五七

品よく高尙に候

右不取敢冒險御願迄 勿々頓首

五月十九日

五葉先生

夏目金之助

座下

四一

五月二十二日

午後零時—一時 牛込區早稲田南町七番地より

本郷區彌生町二番地寺田寅彦へ (二八) 「はがき」

明日午後四時より九段能樂堂にて忠度、調伏會我、隅田川の能あり、小生の席はあまりひろく
なけれど窮屈さへ御忍びなら御光來如何にや、かねての御約束一寸御案内申上候。たゞし御老
人御同道にて不時に來て何處かへ割り込んで呉れと云つてもどうかなるだらう

四二

五月二十二日

午後零時—一時 牛込區早稲田南町七番地より

本郷區彌生町三番地増田方林原(當時岡田)耕三へ (二五) 「はがき」

あしたの御能に愚妻が先達御案内をしたさうだが、ことによると人数が多過ぎて席が足りない
かも知れないから見合はして呉れ玉へ。君はあまり能に興味もなささうだから。此つぎに延ばし
てもいゝだらう。尤も來て見て僕の席に入り切れねば外の席を買ふて一人其所へ移つてもいゝが、
夫程の熱心家でもないのだらう

四三

五月二十六日

午後十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より

府下西大久保百五十六番地戸川明三氏へ (二四)

拜啓先日は夜能にて久々の拜顔うれしく存候其折申上候難物の費思ひ切つて本日試み申候、趣
向は、是は一所不住の沙門にて候といふ前書の後へ、雪の夜や佐野にて食ひし粟の飯といふ句を
書き、其下へ自在に鍋の釣るしてある傍に行脚僧の笠を描けば夫で御仕舞の至極單簡なものに候。

然る處絹地を勿體らしく展べて書いて見ると大き過ぎたり小さ過ぎたり墨色原な變になり過ぎたりして遂に物にならず恐縮してやめに致し候何遍書いても弘法大師以上に行く氣もないのですが、字の巧拙以外に私の字はどう見ても畫の贊らしく見えませんが、たゞ畫家泣かせの種となる許で氣の毒故折角思ひ切つてやり出したのを又思ひ切つてやめに致し候。實をいふとどうしても畫と贊は同人が同時に書かなくてはならぬものかとも存じられ候。然らずは畫の上へ贊をするが順當に候。贊を書いて其下へ繪をかゝせる事は古今に其例あるや否や存せざれど少くとも小生の場合には畫家を雪隠詰にすると同様の意地の悪い仕業に相成候

本日健筆會と申すものを見候、其内に女義の瓢がまづい繪の上になまづい字の贊を致し居候。雙方ともまづい事は受合候へども雙方とも差したる厭味なく且釣合の取れてゐるに感心致し候、斯うなると漱石もついに女義のなれの果に及ばぬ心細い譯になり申候、

序故不折の悪口を一寸申候。あの男の畫も書も駁々乎として邪道に進歩致し候、あゝ恰好ばかり奇抜がつてどうするかと思ひ候。不折先生の善所と申せば昔の一高の生徒が無暗に武張つて是が世の中で一番いゝのだと力み返つたる、あの若殿原の善所に候。高士達人其他色々的人格も有之べけれど一高の蠻カラを標榜する人格は大したものには無之べきか。あまり自分の悪口のみ申すと甚だ不愉快故悪口の材料に不折を生捕申候。夫は單に自他抑揚のためにて決して吹聴の爲には無之故其邊は御含置被下度候

先は右長々の御約束を履行する能はざる事情迄勿々如此に候。

五月二十六日

夏目金之助

秋骨先生

座下

贊はとてもだめに候。今日も悪詩を二枚同時にかき候が是は拙ながらどうかにかかうにか納まり候厚顔さへ承知なら依頼人へ送り得候。あなたへ上る贊丈はいかに厚顔でも逡巡に終り申候

四四

五月二十七日 午後二時—三時 牛込區早稻田南町七番地より

本郷區彌生町二番地寺田寅彦へ (二九)

此間は御老人わざ／＼弊席へ御出被下難有存候狭苦しくて嘸かし御窮屈の事と存候

久振にて東京の御能御氣に召し候由満足不過之候御多忙中御禮に御出などは思ひも寄らぬ事に有之必ず左様の御心配なきやう君より御傳被下度候

別封小包にて小生の詩と書を御覽に入候是は先頃君が僕も一つ書いてもらはうかと云はれし故
此間十餘枚一度に認めたる節大兄の分として特に書きたるもの故決して安いものに無之其積にて
御保存願候尤も表装などはなされぬ方結構に候書道も上達の見込有之故長命致せばもつとうまい
ものを記念としてあとへ置いて行つて上げる考に候然しいつ死ぬか分らぬ故まあ是を上げて置い
てもし長生をしたら出來のよいものと取替やうといふ意味に候。詩は或は大兄の御氣に入るやも
許られずと存候

健筆會と申すもの一覽坂井さんの横に南洋將軍といふ張紙あり一寸奇抜故御吹聴に及候其他久
米八の畫やら竹本瓢の畫やら有之。不折例によつて不良少年の惡達者を發揮致し居候
先は右迄 勿々不一

五月二十七日

寅 彦 様

金之助

御老人へよろしく

五月二十八日

牛込區早稲田南町七番地より
府下西大久保百人町百五十六番地戸川明三氏へ(一五)

拜啓昨日はわざ／＼御斷りの手紙を差上候處今日午前に至り不圖自畫自贊試みたく相成生れて
始めて畫をかき候然る所我ながら見上げた出來榮に有之大に喜び此手紙と同便にて差出候間御受
取り願候。繪は最明寺殿が後向になつてあるいてゐる所と御承知被下度候。斜に出てるものは
杖にて決して刀には無之。山妻は侍が帶劔の姿と間違候間念のため説明を加へ置候。最後に申上
候是はほんの記念として差上るもの故決して表装の上床の間へ御懸け被下に及ばず裝飾品として
は其うち書畫ともに上達の見込あればうまくなつた時改めて立派なものを入御覽る覺悟に候 以
上

五月二十八日

金之助

秋骨先生
座下

五月二十八日 午前十一時—十二時 半込區早稻田南町七番地より

本郷區彌生町三番地増田方林原(當時岡田)耕三へ(二巻)〔はがき〕

昨夜御近火のよし距離ある事と存じ候へども多少御騒ぎと存じ候一寸御見舞申上候

五月二十九日 午後三時—四時 半込區早稻田南町七番地より

清國湖北省沙市日本領事館橋口貢氏へ(二七)

五月十三日附の御手紙四五日前着拜見致候繪端書は四月二十三日に此方を出し候故もうとくに着致して居らねばならぬ筈と存じ受取を持ち郵便局へ掛合に参り候處先方へ聞き合すとの返事に候 恐らくは途中でとられたものにてはなきやと存候 大兄の御送り被下候硯も今以て落手不仕是もどうかと案じられ候 北周の碑文も同様の運命にてはなきやと疑ひ候 支那日本間の小包物はあてにならぬ様前々から思ひ居候が大兄より種々の頂戴物間違なく届き候より大丈夫といふ心を生じ候處に又々斯様の始末にて信用の逆戻に候

御地骨董の御慰み定めて御愉快ならんと想像致居候當地は中々夫所には無之然し健筆會とか無聲會とか色々の催し有之随分面白く御座候小生も誰に劣らぬもの候へばひまが充分だと手習やら繪やら致さぬとも限らず候現に此間は頼まれて奇體な畫を一枚かき申候只今も玉澗流の山水を一枚かき候(笑つてはいけません)大兄が御歸國の時分には眼識高き君にさへ一枚書いて上げる位に上達してゐるかも知れ不申候

先は時候御見舞旁雙方の小包不着の事御通知 勿々敬具

五月二十八日

夏目金之助

橋 口 様

五月三十日 午後一時—二時 半込區早稻田南町七番地より

清國湖北省沙市日本領事館橋口貢氏へ(二八)

拜啓昨日手紙にて硯届かぬ旨わざ／＼申上候處今朝に至り到着満足の至直ちに先便を取消し申候

東京では五圓ではとても買へぬかと存候難有御禮申上候然るに無残にも上蓋の前後カケ甚だしき不體裁是には涙が出る程痛ましく被感候

金子は御仰の通り序を以て清君に托し赤坂の御宅へ御届致す事に仕るべく候先は不取敢右御禮迄 勿々頓首

五月三十日

橋口 貢様

夏目金之助

四九

五月三十日 午後一時—二時 牛込區早稲田南町七番地より

京橋區築地二丁目三十九番地松根豊次郎へ (三〇)

昨日の墨畫御氣に召し候よし満足に至り必ず差上べく候金持の旦那なら表装をしてもらつて貰ふ處なれどまだ御馳走をして謠を聞いてもらふ程の餘裕なき故畫もあの儘にて差上候 但し今朝つらくあれを熟視するに何だか薄ぎたなく少々愛想のつき候點も有之候へどもまあ小生の顔位の缺點故筆者相應の價値は充分と自信致し居候

尤も懸物にするには一ヶ月も眺めた上是なら差支ないと思つた所で表具へやるのが上分別と小生は愚考仕候、一ヶ月あゝして襖に張らして置く事を御承知なら小生表装の可否を大兄の爲に判じ申すべく候 何事もせいては仕損じやすきものに候 先は御答迄 勿々頓首

五月三十日

金

東洋城様

五〇

六月三日 午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より

清國湖北省沙市日本領事館橋口貢氏へ (二九)

拜啓昨六月二日御送の鄭板橋の書六葉正に到〔着〕御手数毎々ながら奉深謝候 板橋の字は奇抜峭勁に候去りながら氣韻含蓄の趣に至つては最高とは申しがたく候 近來當地にては六朝一派無暗に幅を利かし自分の字をかゝずに矢鱈に四角張つたものを作り箱の様な展覽を催し喜び居候

あんな傑張粗獷の體しかも中に何物をも藏せぬ昔の糟粕ねぶりこそ心得難き似せ書家に候
繪端書はついに着致さずや君の方のものは着々參るに此方のものゝみは届かぬとは情なく候然
し高が畫端書に候價は三四圓のものに候其内何か御目にかけて度と思ひ居候
先は右迄 勿々

六月三日

橋口 貢様

夏目金之助

五一

六月三日

牛込區早稲田南町七番地より

京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内杉村廣太郎氏へ

拜啓其後は御無沙汰御變もなく結構に存候先年小生の詩を見て氣に入りたる故書いてくれとの
事大兄は御忘れかも知れぬど小生の方はよく覺え居候小説が濟んでから少し氣晴しに書でも書い
て見やうといふ氣になり昨日御約束のものを書き候故小包にて差上候
僕としてはうまく出來たる方可成御賞賛にあづかり度候外のものと同時に書きたる「ため」つ

い病中の作とする代りに春日偶成と書いて仕舞さりとて書き代へべき絹なき故其儘に致候大兄さ
へ其意味を承知の上は他人は勿論構なく候故たゞ事情丈を申添候 いづれ拜眉萬々 頓首

六月三日

夏目金之助

楚人冠 兄

五二

六月三日

牛込區早稲田南町七番地より

牛込區市ヶ谷甲良町二十番地金子雄太郎氏へ

拜啓先般拙筆御求めに相成承知致しながらついでに遅延致候
閑を得て昨日書き候故御目にかけて候
書くものは俳句なるや歌なりや相分らず手前の都合にて惡詩一首認め申候
先は用事迄 勿々頓首

六月三日

夏目金之助

金子薫園様

一七〇

五三

六月七日

午前十時—十一時 牛込區早稻田南町七番地より
府下大久保百人町五十八番地安倍能成へ(五)

拜復御申越の儀につき御返事申上候御入用の金子もし生存上の必要なる實費不足の意味ならば
一時御用立申してもよろしく候もし又近來流行の色彩とか音楽とか申すものゝ憧憬より生じ候費
用ならば願くは御免蒙り申度候

返濟の義は今年末と御取極被下候方好都合に候是は年末には臨時入費相かさみ候故其方の填補
として利用致度考も有之故に候

金は何時でも御都合のよき折御渡し可申につき御足勞を煩はし度と存候小生不在にても妻にて
相分り可申候

右御尋旁御返事迄 草々不一

六月七日

夏目金之助

安倍能成様

五四

六月七日

夜 牛込區早稻田南町七番地より
本郷區彌生町二番地寺田寅彦へ(三〇)

音楽會へ御出御賛成のよし敬承致候切符も御買被下候由御手数數ありがたく候御老人も御出向の
趣是も可然と存候當日は午後一時頃迄に御宅へ御誘にまかり出べく候間それまで御待被下度候

露西亞音楽團の合唱は服装やら歌の調子甚だ珍品に候土曜の午後六時にもう一遍神田の青年會
館で催ふす由なれば都合して御出掛可然御老人も是非御勧め申候當日は日本の謠ウタを二三うたつて
聞かせる由申居候何しろ四五十人のコーラス故大したもの候

近頃畫をかき候山水畫を襖に貼付候御出の節御鑑定願度候

先は御返事迄 草々不一

六月七日夜

金之助

寅彦様

一七一

五五

六月十七日

(以下不明) 牛込區早稲田南町七番地より

本郷區彌生町三番地増田方林原(當時岡田) 耕三へ(二七)

拜復試験は落第ときまりたる御模様心細く候へども猶の事心細きは御健康と頭の具合に候小生も試験には長年の経験有之候へども未だ御申越の如き苦痛を感じたる試無之果して仰の如き状態なら甚だ困つた事に候出来るなら手傳つて濟ませて上たい位なれど人の頭はいくら明いて居ても間に合はねば致し方なく候

あの手紙を書くうちにももう苦しくて書けないとかいふ意味の言葉有之何だか悲惨な小説か戯曲を読むやうで薄氣味悪く候

かうなつちや是非及第しろと強い言も出でず去りとして落第を希望すといふ電報をかける勇氣も出ず途方に暮れ申候

まあどうしてそんな頭に生れて来たか返す／＼不思議に候も小生だつて仕事の最中に心を亂す事あればもつと烈しい状態に陥らぬとは申されず夫を思へば随分心苦しき報知に候いけなければ途中で試験を抛つてもよろしかるべくあんまり苦しにせぬがよからんと存候

毎日徹夜して頭腦が麻痺する人の心を想像するさへ恐ろしく候 然し氣が弱くて人の行かれる所へ行き得ぬ人も有之候へば退却も停止も勇進もとくと吾心と相談して自分に無理のない様人道を御盡し可然 夫が神を胸に有つ人間の行爲に候 先は御返事迄 匆々

六月十七日

金之助

耕三様

五六

六月十八日

午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より

京橋區築地二丁目三十九番地松根豊次郎へ(三三)

拜復壁十句至急御入用の由につき御目にかけて候すらくと書き上げて讀み直して見ると成程まづ候へども不得已候たゞ作つた丈が殊勝位の處にて御ほめ置被下度候他日油がのり候節は目覺しく十八世紀にて出陣仕るべく候十八世紀も之では威張る自信も出不申候 以上

六月十七日

金之助

東洋城様

壁隣り秋稍更けしよしみの灯
懸物の軸だけ落ちて壁の秋
行く春や壁にかたみの水彩畫
壁に達磨それも墨畫の芒かな
如意拂子懸けてぞ冬を庵の壁
錦畫や壁に寂びたる江戸の春
鼠もや出ると夜寒に壁の穴
壁に脊を涼しからんの裸哉
壁に映る芭蕉夢かや戦ぐ音
壁一重隣に聽いて砧かな

五七

六月二十三日 午後零時—一時 牛込區早稲田南町七番地より

本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ (九二)

拜啓梅雨鬱陶敷御座候處愈御發展奉賀候同封新聞切抜批點の上一寸御目につけ候御參考にも相成候へば幸甚に候 以上

金之助

六月二十三日

豊隆様

五八

六月二十五日 午後一時—二時 牛込區早稲田南町七番地より
本郷區駒込西片町十番地森卷吉へ (六) 「はがき」

此間は失禮あの節御紛失の杖は植木屋が參り玄關前の植込の中に懸つてゐたのを見出し候矢張二男の所爲ならんと存候。あの子は馬鹿故責任も記憶もなきに候

五九

六月二十七日 午後零時—一時 牛込區早稻田南町七番地より

京橋區築地二丁目三十九番地松根豊次郎へ (三三三) 「はがき」

昨夜御持たせの懸物に落款を加へ申候字配り甚だ悪く字も下手にて殊の外恐縮其内出来よろしきものと取替度、先は御詫旁御報迄 勿々頓首

六月二十七日

六〇

七月三日 午前十時—十一時 牛込區早稻田南町七番地より

清國湖北省沙市日本領事館橋口貢氏へ (三三〇)

竹莫塵又々着毎々難有候から始終頂戴致しては恐縮に候
紹の如き(帶か)織物氣が付かず候處新聞紙のうちより出現致し候由にて直ちに浴衣の腰に巻きつけ申候

此間清君を訪問其節硯の代を御頼み致候 吳春の卷物四卷其みぎり拜見腕の冴えたる男と感服然し毫も重厚の趣なきは畫風として致方なきにや光琳派の草花一雙同時に披見吳春と比較して品位の高さに驚ろき申候

硯蓋破損の處修繕と、のふやの由にて只今唐木細工屋へ依頼致し置候色合つき具合うまう行けばと案じ居候

支那の騒ぎも一先落着の様昨今は堀出物にて忙殺され玉ふ事と存候可成多く御持歸り御見せ被下様今から願置候
先は不取敢御禮旁近況御報迄 艸々

七月三日

夏目金之助

橋 口 様

六一

七月十三日 使ひ持參 牛込區早稻田南町七番地より

笹川種郎氏横山大觀氏へ

拜復御手紙難有拜見致候幸ひ氣分もよろしく候へば貴意に任せ御指定の場所へまかり可出候先は右御返事迄 艸々頓首

七月二十三日

笹川様
横山様

金之助

一七八

六二

七月十五日

午前十時—十一時 牛込區早稲田南町七番地より

本郷區駒込西片町十番地笹川種郎氏へ (三)

拜啓一昨日はとくに御多忙中小生の爲に盃蘭盆會御開被下難有候平野水ばかり呑んで一向浮かれず中途にて茶漬をくひ退出甚だ我意の振舞平に御高免被下度候一寸御挨拶申上度も其爲にわざわざ罷出るも仰山故手紙にて一寸御禮旁御詫を申上候いづれ不日拜眉の節萬々可申上候 不一

七月十五日

金之助

臨風詞兄

座下

六三

七月十六日

午後三時—四時 牛込區早稲田南町七番地より

福岡市福岡醫科大學前きりや山本器械店方中勘助氏へ (三)

拜啓御令妹御病氣面白からぬ御模様にて御地にて御看護の由嘸かし御心配の事と存候
貴稿の儀は拜見の約束有之候も社の方へは何にも交渉致し居らずたとひ交渉致候も文藝欄全廢の今日小生と編輯とは全く無關係の姿故如何相成可申かも分らず候へば御任意にて適宜に御まじめ可然かと存候決して夫程堅き約束にてもなき事に執着して無理をなされぬ様吳々も希望致し候
尊稿の運命小生の手の中に自由にならぬ今日は猶更御懸念の入らぬ事と御承知被下度候

御病氣は性質のよろしからぬものゝ様被存候時節柄一層の御心配と深く同情申上候兎に角御攝
養專一と存候先は右御返事迄艸々如此候 不一

七月十五日

夏目金之助

中 勘 助 様

一七九

七月二十三日 午前十時—十一時 牛込區早稲田南町七番地より

福岡市紺屋町十六番地藤澤氏内中勤助氏へ(四)

拜啓御令妹御養生の甲斐なく遂に御逝去の由嘸かし御愁傷の事と遙察たゞ御同情の念に不堪候
後事萬端の御處理是亦定めて御心勞と存候

二三日前鎌倉へ小供をやり候につきあの地へ参り候ため御報に接しながら筆を執るの違なく御
挨拶も後れ申候 昨夜歸京不取敢御弔詞迄如此候 いづれ御歸東後拜眉萬々可申述候 以上

七月二十三日

夏目金之助

中 勤 助 様

七月二十五日 午前九時—十時 牛込區早稲田南町七番地より

鹿兒島市上龍尾町九十三番地野間眞綱へ(七)

拜啓其後は御無沙汰の處愈御清適奉賀候小生も不相變消光たゞ病後は前と違ひ少々烈敷活動す
るとすぐ胃部に故障を生じやすく夫が爲め本年大阪社にて催ふしの講演も斷はり申候 只今は何
の變りもなく此間小供を鎌倉へやり歸京後は淋しく暮し居候

皆川君へも御無沙汰亦異状なく謠道も上達の事と存候

御申越の○○○の儀敬承精々心掛可申候へども○○○杯はとても餘地なき模様其他は小生に
も分らず○○○も○○○要らぬ事と思はれ候暑中○○○もよけれど○○○の方面と○○○を多少御考の
上にて御奮發にならねば不可かと存候尤も久々にて○○○の爲なら無論御勸め致候

橋口の兄よりは時々音便有 清君にも時々面會致候

永らくの御籠城如何な故郷も少々鼻につき可申御同情に不堪候不取敢右御返事迄 艸々拜具

七月二十五日

金之助

眞 綱 様